

真宗大谷派名古屋別院 『從明治十四年至明治十七年御成記』 —解説と翻刻—

小島 惠 昭

I 解説

本研究は真宗大谷派名古屋別院発行の『名古屋別院史』編纂の主体となり、とくに「史料編」はその編者を担当した。「史料編」は二分冊のものとなったが、その史料の多さから一部分の史料を掲載しやむなく多くの史料の掲載を断念した。そのため翻読作業に協力した名古屋大谷クラブ古文書の会は、「史料編」の掲載から離れた貴重な史料のうち輪番の事務記録「御用留」四冊を翻刻発行した。これによって「史料編」近世編が補完されることになった。「史料編」近代・現代編はI財産台帳・II編年史料によって構成したが、II編年史料は印刷物から引用したため、名古屋別院の史料のなかでも比較的にまともに残されている明治前期のものが掲載から離れた。そのこともあって筆者は「真宗研究」

三十五輯で「明治初年尾張藩真宗寺院の護法運動」を論じたなかに、明治初年の神仏分離にかかわる名古屋別院の史料の一部分を翻刻して載せた。

ここで翻刻紹介する史料は冊子装のもので、その表紙に「從明治十四年御成記／輪番伊地知覚準」と記されている。名古屋別院にはこの史料のほかには享保年間の「御成記」が残っており、その一部分は「史料編」近世編に翻刻した。もともと「御成」とは貴人の外出・来着の尊敬語であるが、享保年間のものがあるように「御成記」は東本願寺の門主や新門の「御成」を記したものである。とはいえこの史料はそのほか種々の貴人の「御成」をも記している。それについては「御成記目録」に分類して朱筆で記号が記されている。「甲」類は第二十三号まであり、東本願寺の門主や新門の「御成」を記す。「乙」類は第五号まであり、東本願寺の裏方や連枝の「御成」を記す。「丙」類は第七号まであり、ほかの

真宗本山の門主などの「御成」を記す。このほか「御駐輦」が第二号であり、天皇の「御成」を記す。しかし「御成記目録」に「……御成」という標題で記されるのは「甲」類のみで、そのほかのものは「……御入」とか「……御立寄」とか「……御一泊」というような標題で記される。したがって名古屋別院への「御成」とは、東本願寺の門主や新門の来着のみをいうのである。

この史料は表紙の「従明治四年
至明治十七年」の期間まで同筆で記されている。名古屋別院の「輪番交代記」によると、「輪番正念寺覚準」は明治四年四月八日に正式に着任してから明治十七年四月二十九日に退任するまでその職務にあった。したがってこの史料の筆者は表紙の「輪番伊地知覚準」であろう。かれは自分の姓を「伊地知」と記しているが、正念寺の姓は正しくは「伊知地」である。この史料には伊知地輪番のものとは異なった手で追記がなされている。その部分は伊知地輪番の詳細な記載とは異なり、簡略な記載で明治二十三年まで記している。

伊知地輪番以前、輪番は本山御堂衆寺院出身者が任命され、地方の御坊に赴任していた。在任期間は一・二年が原則であった。かれが着任したところは東本願寺の宗務機構が改革されつつあったときである。本山の改革とともに地方の御坊の改革も行われていった。例えば「名古屋御坊」の名称変更について略述すれば、次のようである。明治五年一月、これまで門末に対して使ってきた「名古屋御坊」とか行政に対して使ってきた「掛所」という称号を「名古屋本願寺」と正式に改めた。ついで明治

六年三月、「名古屋管刹」と名称変更が行われた。さらに明治九年十月、「管刹」は現在の「名古屋別院」と改められた。

江戸時代、門主や新門の名古屋御坊への「御成」は幕命による江戸参向の往還に立寄ったときや名古屋御坊で法要執行のため下向したときであった。それらの「御成」はほぼ数十年ごとのことであった。たとえば名古屋別院に写本が残っている「名古屋東御坊記録根元二日講記録」をみると、元禄十二（一六九九）年の一如下向、元禄十五（一七〇二）年の真如下向、延享三（一七四六）年の従如下向、宝暦九（一七五九）年の従如下向、寛政三（一七九二）年の乘如下向、寛政八（一七九六）年の達如下向、天保四（一八三三）年の達如下向が記されている。幕命による江戸参向の往還に立寄ることはともかくも、名古屋御坊で法要執行のため下向するときは尾張藩の認可が必要であった。たとえば元治二（一八七五）年の親鸞六百回忌執行のため厳如・現如が下向しようとしたとき、尾張藩は幕末の社会情勢によってなかなか認可しなかったことがある。しかもこのときは幕命による日光社参および江戸参府の往還に立寄る日程であった。

明治維新以降、門主や新門の名古屋御坊への「御成」は頻繁になつていく。その原因は維新政府が明治五年三月十四日、これまで設けられていた神祇省を廃止して教部省を設置して教導職という職制を定め、全国の神官と僧侶をこれに任命したことにある。「甲第三号」の厳如東上のため「御成」は教部省出頭の往路に立寄ったものである。このとき厳如

は教導職筆頭の大教正に任命されている。これ以降、東京への出府が頻繁である。明治二十二年、巖如は退隠して現如が継職しているので、「法主」は巖如（大谷光勝）、「法嗣」は現如（大谷光瑩）のことである。

この史料の時代は、維新政府が明治初年の急激な神道国教政策を転換し、仏教も絶対的天皇制を国民に教化するため利用しようとしたときである。教導職に任命された仏教各宗僧侶の新しい任務の研究教育機関として設立された大教院に、真宗四派は反対して分離の請願運動を行った。明治八年一月二十九日、真宗四派の請願は太政官により許可された。しかし維新政府は真宗を体制内に組み込もうとして、明治九年十一月二十八日、明治天皇に親鸞へ「見真」という大師号を宣下させている。「甲第十三号」はその宣旨を奉じての帰路に立寄ったことである。「甲第十四号」はその親鸞への諡号を記念しての法要執行のため下向したことがある。体制とのかかわりは明治十一年十月二十五日から二十八日の明治天皇の行在所になることによっていっそうつよめることになった。その後も名古屋別院は明治天皇の行在所となった。

最後に、この史料の翻刻方法を記しておくが、これは「史料編」のものになるべく準じるようにした。

- 一、漢字の字体は新字体を用い、新字体のないもの、および古字・略字・異体字などはなるべく正字体に改めた。
- 二、平仮名の合字「ㇿ」（より）はそのまま活字を小さくした。
- 三、送り仮名はそのまま活字を小さくした。

真宗大谷派名古屋別院【従明治四年
至明治十七年御成記】

四、助辞の「者」（は）、「被」（られ）はそのままとし、「而」（て）、「与」（と）、「茂」（も）、「江」（え）、「而已」（のみ）、「井」（ならび）はそのまま活字を小さくした。

- 五、宛字・誤字は原則としてそのままとした。
- 六、句読点は任意に付した。
- 七、朱筆はゴチック体とした。

II 翻刻

（表紙）

「従明治四年

至明治十七年

御成記

輪番

伊知地寛準

御成記目録

甲第壹号

明治四年未九月二十六日

御法主殿御成 前住上人御七回忌御法事御執行

甲第二号

明治四年未十一月十四日

同朋学園佛教文化研究所紀要第十三号

御法嗣殿御成 御東上_二付

甲第三号 明治五年甲申五月二十六日

御法主殿御成 御東上_二付

甲第四号 明治五年八月廿三日 〆晦日近 明

御法主殿御成 御帰山_二付

但御滞在中西本願寺別院_〇御招待_二付御入

丙第壹号 明治五年八月二十八日

錦織寺御法主御立寄 御東_二付御一泊

甲第五号 明治六年二月十六日

恒君様御成 御法嗣殿御裏方御帰西_二付

乙第壹号 明治六年二月

御連枝速悟院殿御入

丙第二号 明治六年四月四日

高田常盤井大教正殿御入

丙第三号 明治六年四月

西本願寺大教正殿 御東上_二付宮駅江御機嫌窺
出願之事

甲第六号 明治六年四月二十一日

御法主大教正殿御成 御東上_二付

丙第四号 明治六年五月

大教正近衛殿御入 神道御派出_二付

丙第五号 明治六年八月

高田大教正殿御入 為僧侶検査御派出

甲第七号 明治六年十一月廿五日

御法主大教正殿御成 御帰山_二付

乙第二号 明治七年二月十一日

御連枝応正院殿御入 御東上_二付

甲第八号 明治七年七月

御法嗣 御東上鳴海駅御一泊

甲第九号 明治八年一月三十日

大教正殿御成 御東上_二付

乙第三号 明治八年五月廿九日

弥姫様御立寄 御帰西_二付御一泊

甲第十号 明治八年六月三日

大教正殿御成 御帰山_二付

甲第十壹号 明治九年六月一日

御法嗣殿御成 無碍光院殿百五十回忌
御法事_二付

乙第四号 明治九年九月

御連枝撰光院殿 三河国赤羽別院江御入

甲第拾貳号 明治九年十一月

御法主殿 御成之処極御急_二付宮駅_二御機嫌窺

甲第拾参号 明治九年十二月

御法主殿御成 諡号宣旨管守_二御帰山

丙第六号 明治九年十二月十六日

西本願寺大教正殿

御東上ニ付宮駅ニテ御機嫌

甲第拾四号 明治十一年三月

御法主殿御下向

謹号供養会ニ付

御連枝靈寿院殿御入

御駐蹕第壹号 明治十一年廿五日

御巡幸御行在所

丙第七号 明治十一年十月廿六日

高田大教正殿

高田別院ニ御入ニ付御機嫌

甲第十五号 明治十二年二月

御法主殿御成

豊橋別院再興御親詣夫リ御東上ニ付

甲第十六号 明治十二年四月

御法主殿御成 御帰山ニ付

乙第五号 明治十二年六月一日

晴姫様御入 東京岩倉殿ニ御引越ニ付

甲第拾七号 明治十三年四月廿日午後三時御着

嘉枝宮様御一泊

大教正殿御裏方岩倉殿ニ御出頭ニ付

御連枝靈寿院殿

御母君御見送之為御入

甲第十八号 明治十三年六月廿八日午後五時御入

嘉枝宮様御一泊 御帰山ニ付

御駐蹕第二号 明治十三年六月三十日

真宗大谷派名古屋別院(從明治十四年至明治十七年御成記)

御巡幸御行在所

甲第十九号 明治十四年五月

御法主殿御下向

門上ニ尊像開眼会入仏供養会等ニ付

御連枝撰光院殿御入

甲第二十号 明治十四年九月

御法嗣殿御一泊

三州豊橋赤羽別院御法事御下向ニ付

甲第二十一号 明治十五年四月廿五日

御法主殿御一泊 御東上ニ付

甲第二十二号 明治十五年六月二日

御法主殿御一泊 御帰山ニ付

甲第二十三号 明治十七年四月五日午後一時三十分御入

恒姫様御一泊 御法嗣御裏方御帰山西ニ付

明治十七年十二月報恩講ニ付

靈寿院殿御入

同十七年七月十八日十九日

御法嗣殿御成

同十八年十二月十三日ヨリ報恩講ニ付

撰光院殿御入

同十九年五月三日ヨリ六日迄

御法主殿御成

新々御法主殿御成

同十九年十一月二日ヨリ十九日迄

御法嗣殿御成

明治十九年十二月十三日ヨリ報恩講ニ付

摂光院殿御入

明治二十年五月十四日十五日十六日

御法主殿御成

同時 新々御法主殿御成

御成記

甲第号

明治四年未九月廿六日

御人輿
御發途

御法嗣殿東京ヨリ御帰西ニ付御立寄

御供方

御家老 川那部二郎兵衛

御近習 宮谷曇雄

集会所 皆演坊

村田 収

御勝手方 田淵藤二

大石五六

同 堀場宗二郎

尾崎 漢

小奏者 井田数太郎

佐々木 嗜

小持主 知田宗三郎

茶道 浅野翫斎

煮方 陸田駒藏

書記 湯川郡太

川那部 若克吉人

鐘頭 北村桑藏
惣下男 七人
御障尺

同十月一日ヨリ四日迄

前住上人無上覚院殿御七回忌御法事

御執行有之候事

参勤

院家衆 聖徳寺

御堂衆 即現寺

皆乗坊

閑唱寺

参勤惣共 下男貳人

先輪番 証誠坊 臨時参勤
被仰付候事

御發途之節

御小休

宮駅 紀伊国屋

夫々乗名江

御乗船

輪番役僧桑名迄御見送

御滞逗中_{申御経} 御免有之候事
_{御剃刀}

甲第二号

明治四年未十一月十四日

御法嗣殿東京江御下向有之、御道筋東海道輪番役僧勢国御旅中江御出迎

出頭御立寄重々願上候処、火急之御用ニ付別院御立寄無之、桑名_{宮江}

御渡海宮駅ニテ御一泊町在同行中_{金百円御機嫌伺被差上候也、例之通}

三州地ニ御見送申上候事

御小休 海艘会所

御泊

甲第三号

明治五年 壬申五月廿六日西京御発途ニテ御東上

御法主殿晦日 御入輿 六月一日 御発途

東京江御下向ニ付御立寄有之

御一泊 於当管利

御供方

円重寺 尾崎信盛

等観寺 飼田辰寧

大念寺 井田政一

医師 田淵敬二

中番 兩人

障尺 六人 惣下男三人

御道筋東海道御法主殿御東上ニ付、御立寄之旨御旅中尾崎殿水口駅合報

知有之、早々御迎遠見人足差出置候、但御出迎之義輪番臨時用有之、

代理寺務方役僧行円寺廿九日未明ヨリ勢国江向差出シ、同日桑名管利御入

輿御一泊ニ付御機嫌伺候事、其夜当国同行多人数桑名管利江御機嫌伺罷

出、其節佐屋街道御通行願新街道御通行願同行ニ途ニ相分レ両方共強願

申立候処、段々談判之上先佐屋街道与御治定有之候、然ル処翌廿九日桑

名御乗船前ケ須江御着船之砌俄ニ新街道同行合種々苦情申立彼は大混

難ニ相成、行円寺合態飛脚ニテ其旨申来、即刻輪番馳付及説諭候処両方共

中々聞入不申、依之佐屋街道神守宿迄御通行同所養源寺ニテ臨時御一泊、

翌卅日同所合川筋御乗船ニテ福田新田江御廻リ服部宅左衛門方御昼、夫合

新街道御通行相来同日夜ニ入管利江御入輿相成、誠ニ何レ茂大心痛之事ニ

候也

御道筋

前ケ須合神守迄

御小休

御昼

神守迄御馬

御一泊 神守 養源寺

御小休

日光川御船

御昼 福田新田 服部宅左衛門

御小休 下之一色村

御小休 八九説教所

管利御入

六月一月御発途

御小休 熱田

御小休 鳴海

御昼 阿野三田無忍

大久伝金右衛門ノ悉皆御調進被申上候事

御小休 知立木綿屋

御一泊 三州暮戸会所

輪番并役僧岡崎駅迄御見送申上候事

甲第四号

御滞在中西本願寺ノ御招待

明治五年八月廿三日ヨリ晦日迄御逗留

御法主殿御東上中、御参内之砌金銀丸龍之置物御拝領有之、夫ニ付当国

同行右御拝領物御迎、且当管刹御立寄報恩講引上御執行被成下度旨、願

旁為伺御機嫌夫々東上致シ候、其後七月十七日態々火番垣見覺右衛門ヲ

以、報恩講御執行之義書面ニテ奉願上候处、左之通御回答有之候

本月十七日附貴札昨廿四日相達致拜誦候、先以御定式奉恐悦候、然者御

発輿御日限弥廿九日ト今朝御治定被仰出、則別紙御泊附日割御廻シ申候、

就而者其御坊御待請等之儀万端御不都合無御座候様御取計可被下候、尤

報恩講御引上御執行之義御申越、右者逆茂御六ヶ敷難相叶義ニ御座候、

尚又御坊之外御道筋タリ共外御末寺江ハ御入無之旨御治定御座候間、夫是

御心得ニテ御取計御尤ニ御座候、扱追啓ニ御申越之通、御小休等之義ハ御

都合能精々御尽力御周旋可被下候、尚時宜ニヨリ御先番言人出張有之候

間、同人江茂可然御示談御取計可被下候、右之段不取敢貴答得御意如斯

御座候、恐惶謹言

在浅草御坊

七月廿五日

大念寺

等觀寺

円重寺

名古屋御坊

正念寺様

猶々御法主様昨廿四日御用召ニ付御参朝之処、別紙之通御拝領物御座候、幸便為御知申候、以上

別紙三ツ折表ニ

東本願寺江

東本願寺

御一新ノ際ニ方リ

鞠躬盡力其効

不少候段

金龍置物一具

献感被為在候依

之別紙之通下賜

候事

壬申七月廿四日太政官

廿九日御泊

神奈川

晦日

大磯

八月朔日

小田原正忍寺

二日

三島

三日 蒲原
 四日 静岡
 五日 御逗留
 六日 金谷
 七日 懸川 円満寺
 八日 浜松
 九日 豊橋
 十日 赤坂
 十一日 岡崎 専福寺
 十二日 御逗留
 十三日 名古屋 御坊御着
 以上

沿道説教日割

七月晦日 神奈川 旅宿
 八月朔日 大磯 旅宿
 二日ヨリ 四日迄 足柄県説教
毎日午後二字説教
 三日四日午後十字説教
 五日 小田原 正忍寺
三島 旅宿
 六日 蒲原 旅宿
 七日 静岡 掛所

真宗大谷派名古屋別院
延暦十四年御成記

八日九日 静岡県説教
毎日午前十字教誡
 午前十字説教
 十日 同 寺
 十一日ヨリ 十三日迄 浜松県説教
毎日午後二字説教
 十一日十三日午前教誡
 十四日 掛川 円満寺
 十五日 浜松 旅宿
 十六日 豊橋 掛所
 十六日 渥美郡説教
午前十字教誡
 午後十字説教
 十七日 同 寺
 岡崎 専福寺
 十八日ヨリ 廿一日迄 額田県説教
 刻限如例
 廿三日 名古屋 掛所
 廿四日 同 寺
 廿五日ヨリ 廿八日マテ 報恩講引上
 廿九日ヨリ 九月四日マテ 愛知県説教
 刻限如例

五日 桑名 掛所
 六日ヨリ 十日マテ 三重県説教 同 寺
 刻限如例
 十一日 龜山 法因寺

十二日十三日三重県南郡度会県説教

刻限如例 同寺

十四日 日野本誓寺

十五日滋賀県下田賀蒲生説教

刻限如例

十六日 金堂 弘誓寺

十七日同県下神崎蒲生説教

十八日 赤ノ井掛 所

十九日同県下野洲栗太説教同 寺

刻限如例

廿日 大津掛 所

廿一日同県下滋賀郡説教

刻限如例

廿二日 著 京

一筆令啓述候、陳者大教正殿去ル七日無御別条静岡掛所江御到着御説教ニ相成候、就而者愛知県下説教来ル廿二日其掛所江御著、廿三日ヨリ晦日迄七日之間御説教ニ相成候条、此段為御心得申置候、右ニ付権少講義擬講專覚寺潜龍先驅ニ而其掛所江出張之筈ニ候間、委曲同人江御談判有之、県庁御届方並ニ全国末寺等之都合御周旋有之度候、先者右為御報知如此候也

在駿州静岡
本願寺掛所出張

壬申八月九日 寺務所印

尾州名古屋
本願寺掛所

正念寺殿

尚々御休泊万端取扱ノ為、尾崎信盛先驅ニ而出頭之筈、是亦御打合有之品能御周旋可被来候也

追啓

一、先般為御迎氷室茂兵衛等東京迄罷出候ニ付、今般從天朝御拝領之御品御守護申帰国可致旨申聞、定而比日到着と存候、尤御品者廿三日御到着ニ相成候迄輪番ニ而御預リ申上候様との事ニカ

一、先般御滞留中報恩講引上之義内々御伺も有之、且東上之同行よりも申出候得共、報恩講引上之義者御聞届無之候間、此段御承知置可被成候、此儀者一旦御聞届ニ茂可相成哉之旨、右同行江申聞候得共、其後御帰京日限少シ御縮メ無之而者不相成候義出来、且御説教ト混緒致シ候間、断然御止メニ相成候也

略章

大教正殿沿道御説教遠州路江無恙御通行之御事奉恐悦候、就而者其掛所日割東京ニ而者報恩講御執行ニ而凡十日之決程之処、此度七日ニ御縮メニ相成候、尤報恩講ハ御聞済無之、来ル廿三日岡崎御着坊廿四日御休暇無之、同日、晦日迄七日ノ間御滞留御説教、併廿七八両日ハ御説教御除可然、与被仰出候間、御説教都合五日ニ相成候、其辺御注意ニ而都合能御取

計可被下候、小子儀ハ十三日十四日之内ニ貴所迄先駆致候間、左様御承
諾置可被下候也

壬申八月十二日
大教正殿先驅
擬講專覺寺

愛知縣掛所御輪番
正念寺様

御法主殿弥当廿九日御発輿被遊候、然_レ者何_レ御路次御教諭被為有之候
御事ニ付、御地之御摸様者定_而万事御旅中寺務所_ノ御達も可有之候、小子
義俄ニ御供被命隨行ニ_而參上可致候間、万端御配意之程奉願候、若一御
途中異変も御座候_テ早々可申上候、任幸便右御承知迄如此ニ候也

七月廿六日
東京ニ_而
神守村養源寺 仏乘院

名古屋管判
正念寺様

右之通御達ニ付

八月廿二日未明御迎出頭致シ、三州岡崎駅ニ_而御伝受、同所ニ_而御一泊、
御着後奉伺御機嫌、且以箇条書ヲ万端奉伺候事

一、先駆專覺寺本月十四日至着ニ付、十五日同寺并輪番出県仕御届濟相
成候

并ニ左之通西柵門前ニ建札仕候旨言上仕候事

真宗
說教 当山

真宗大谷派名古屋別院【從明治十四年御成記】
【聖明帝十七年御成記】

來廿四日ヨリ晦日迄午前第十時
午後第二時

一、御法主殿御精日伺候処、左之通御達有之

四日 五日 六日 御精日
廿五日 廿七日 廿八日
三日 十七日 朝斗 御精日
廿九日 廿二日

一、御法主殿御滞在中勤行式本廿四日彼岸会結願ニ付、詳細書早速可差

出旨岡崎ニテ御達有之、即日左之通勤行式相認上申仕候

勤行式

八月廿四日
一 晨朝卯刻鐘 彼岸会結願

御勤 正信偈 中拍子 次第六首
和讃 回り口 光明月日 念讚洵五三

七遍反 世尊我一心
回向文

一 御文回り口
一同日辰刻鐘

御勤 文類偈 四句目下
和讃 神力自在 次第六首
ユリ五三

七遍反 願以此功德
回向文

以上

一 廿五日晨朝卯刻鐘
御勤 正信偈

和讃 本師源空世ニイテ、
七遍反

回向文 願以此功德
御文 回り口

一廿六日晨朝叩刻鐘
御勤 正信偈 舌々

和讃 安楽仏ノ依正ハ
回向文 願以此功德
御文 回リ口

一廿七日晨朝叩刻鐘
御勤 正信偈 舌々

和讃 本師道源三首
大心海三首
回向文 願以此功德
御文 回リ口

一同日御速夜未刻鐘
御勤 正信偈 行四句目下

和讃 自余ノ九方
次第六首
ユリ五

七遍反 我說彼尊
回向文 聖人一流
御文

一廿八日晨朝叩刻鐘
御勤 正信偈 中誦

和讃 宝林宝樹
次第六首
ユリ五

七遍反 世尊我一心
回向文

一同日日中辰之刻鐘
御勤 正信偈 行四句目下

和讃 七宝ノ宝地 前同断
七遍反

回向文 願以此功德

一廿九日晨朝叩刻鐘
御勤 正信偈 中拍子

和讃 尊者阿難
七遍反
回向文 願以此功德
御文 回リ口

一晦日晨朝叩刻鐘
御勤 正信偈 舌々

和讃 無碍光仏ノヒカリニハ
回向文 願以此功德
御文 回リ口

右之通上申仕候事

大教正殿

廿三日岡崎駅御発途

御小休 暮戸会所

同 大浜村

同 知立駅木綿屋

御昼 阿野三田無忍

大久伝中島金右衛門ヨリ 悉皆御調遣被申上候

御小休 鳴海御門徒 野村善兵衛

御小休 熱田肝煎 源田清左衛門

管利御到着

此節白衣五条袈裟^ニ而御玄門ヨリ御居間^江御案内

供奉御人数

隨行長 法因寺 同 円重寺

大念寺 先驅專覺寺

平隨行 仏乘院 尾崎信盛

飼田辰寧 野崎參吾

井田政一 村田喜右衛門

田淵敬二 醫師 齋藤安行

參勤三名

聖德寺 桑名輪番 即現寺

三州御使僧 西宗寺

北村榮藏 大井權藏

西本新十郎 講者徒僧 阿 人

聖德寺徒僧 卷 人 同侍 卷 人

醫師 下男卷人 桑名輪番 下男卷人

西宗寺 下男卷人 惣共 下男卷人

陸尺七人

一、廿四日ヨリ晦日迄七日之間

每日午前第十時 各寺住職 始僧侶之分 御教誡於古御殿有之

但今般源重之御直諭ニ付各名御請書差上候事

毎日午前午後兩度御説教於本堂有之

引次御親教御趣意演説有之候事 引次対面所ニ於テ毎日説教有之專覺寺勤之

一、尾三両国惣末寺人撰之上、左之通役儀被命候事

准学長 学塾助講 学塾幹事

真宗大谷派名古屋別院 【從明治十四年御成記】

学塾補幹事 説教係 説教助勤

右役員被申付候付、以後毎月当管利始国内拾六組共説教日取定、開筵相成候事

一、右ニ付今般御滞逗中諸願御取扱ハ更ニ無之候事

西本願寺へ御入

一、当地西本願寺ヨリ御立寄御親教願有之、右ニ付為御機嫌伺左之寺院

出頭

金式百疋ツ、 輪番 唯念寺

同 御使僧 快樂寺

同 役寺惣代 成満寺

法中惣代 教順寺

淨教寺

円勝寺

煉羊羹巻箱 教泉寺

善導寺

真広寺

覚正寺

延広寺

講中惣代 勘定講

吟味講

廿五日講

元結五千把

御堂講

円勝寺

御花講

教泉寺

莊嚴講

浄慶寺

女人講

延広寺

尼講

善導寺

一、西本願寺御招待ニ付、晦日当管刹御親教御引上ニ而

午後三時西方江御成有之

右ニ付御土産物左之通

一金五百疋

輪番 唯念寺江

一扇子拾本

御使僧 快樂寺江

一金二百疋ッ、

役僧 三ヶ寺江

一但三種箱入

法中惣代教順寺始

一御菓子貳拾斤

講中惣代勸定講始

次ニ輪番御使僧ヲ始法中諸講中江御礼有之

法中御礼目録

金五十疋ッ、

一金百疋ッ、

興善寺

真宗寺

長円寺

西源寺

万海寺

普光寺

教順寺

照光寺

光暁寺

東漸寺

浄教寺

法光寺

受徳寺

目録

以上

常念寺
西念寺

以上
目錄

西本願寺
勘定講

伊藤喜兵衛

花頭与兵衛

野村理左衛門

杉本新兵衛

山田庄右衛門

中川順二

林久作

伊藤清助

林久助

以上

目錄

金五百疋

同貳円

同五百疋

同五百疋

同三百疋

同壹円

同壹円

同百疋

以上

一、御親教、本堂正面御奥之上二

引次、演説有之

一、金五千疋

大教正殿江御親教御冥加志
西本願寺ヨリ献上有之

供奉人数

西本願寺御供方江御会釈左之通

目錄

金三百疋

同貳百疋

同貳百疋

同断

同断

同百疋

同断

同断

同五拾疋

同断

同断

女人講

尼講

女性講

隨行長 円重寺

法因寺

大念寺

先駆役 專覚寺

輪番 正念寺

尾崎信盛

村田喜右衛門

斎藤安行

寺務役僧 正覚寺

同 行円寺

專覚寺 從僧

真宗大谷派名古屋別院
【聖明治十七年御成記】

同断 輪番附侍一人

鳥目三貫文 捧頭卷人

同拾貫文 陸尺四人

同壹貫文 御長持宰領 卷人

同壹貫文、御長持釣人 兩人

同壹貫文 管判 伴僧卷人

同三貫文 下部 三人 江

以上

外ニ金貳百疋 隨行長 円重寺

同貳百疋 前後同施ニ付 正念寺

同五十疋 行円寺

一、九月朔日御發途

新街道御通行ニ付、前以順路并御小休之ヶ所等再三見分致シ取宛之上及言上、御途中更苦情無之様双方ヨリ連印請書為差出候、并順路各村名里数川渡等明細絵図面ニ認メ、御手許江差上御道筋伺上候処御聞濟ニ而、右御治定相成候事、尤当日ハ役僧一同手分ヲ致シ、諸講中并重タル同行夫々同伴ニテ川々エ出張為致置、輪番肝煎同道桑名江御守護申上候事

新街道

御小休 名古屋一里 熱田 山田清三郎

御野立 堀川渡シ 八九ノ割 橋本忠八 熱田半里

御小休 同所 半里余 東起村 榊屋伊三郎

御野立 庄内川渡、下ノ一色村 某 同所 七八丁

御昼 新川渡、西福田新田 服部宅左衛門 同所 一里余

御小休 福田川押藪川 志水太十郎 同所 一里余

御小休 孫宝川 前ヶ須駅 佐藤七左衛門 同所 一里余

同所ヨリ 桑名江

御乗船

輪番正念寺助勤皆乗坊御見送

桑名管判ニ於テ御親教有之、引次演説名古屋輪番江被命勤之

四日市迄兩人共御見立申上候事

丙第壹号

御法主殿御成中

明治五年八月廿八日午後御入興、廿九日午後御發途

錦織寺御法主木辺賢慈殿御入

同九月高田一身田常盤井大教正殿本坊江御入興ニ付、輪番御機嫌伺出

甲第五号

明治六年二月十六日

御法嗣殿御裏様恒君様御立寄御參詣有之

御供

長覺寺 用人 卷名

老女卷人 女中卷人 下男兩人

但東京ヨリ御西上十六日御入十七日御滞留ニ付、輪番始肝煎諸講中夫々

献上物致、別段於古御殿御札有之候事

十八日御発途御小休、熱田夫桑名江御乗船之事

乙第壹号

明治六年二月

御連枝速悟院殿御立寄

御供 等觀寺 俗役兩人 法因寺 下男壹人

但御逗留ニ付御説教有之、引次隨行兩名説教被勤之候事

丙第二号

明治六年四月四日

高田一身田常盤井大教正殿当管利江御參詣有之

御供人数

家快

長岡信愿

隨行者

中講義 松山忍誠

同

權訓導 上杉大舜

卒

吉田尚吉

輪番

善福寺

惣肝煎

伊藤忠左衛門

世話方

大島善七

丙第三号

明治六年四月

西派大教正殿御東上ニテ熱田御通行ニ付、輪番御機嫌伺出頭之事

甲第六号

明治六年四月廿一日御成

大教正殿御東上ニ付、御立寄御一泊

御供方 不分明

但御日限并御道筋左之通り

十六日

西京本山御出門

十九日

御泊 関ヶ原

御昼 大垣

二十日

御泊 墨俣榭屋

同所ヨリ起宿迄 貳里ニテ

御小休 次賀町某

御小休 起宿米屋茂兵衛

御昼 萩原宿起ヨリ 卷里 森半兵衛

御小休 稲葉宿卷里半 山田市三郎

御泊 卷里半 佐藤勘助

廿一日

御小休

清須壹里 川村新藏

御小休

西枇杷島壹里矢橋吉右衛門之処
俄ニ会所ヲ持出之事

御小休

巾下戸田町 金沢屋

午前十時頃一里余 管利御着

当日法中肝煎
譚講中 御礼 御一泊

廿二日

農朝御出仕
直様御發途

朝計御精日

御小休

熱田桔梗屋門口ニテ
一里御興之儀御礼 山城屋

御小休

鳴海駅一里半 近藤佐平

御一昼

阿野一里余 三田無忍

悉皆中島金右衛門ヨリ御調進之事

御小休

知立駅 木綿屋

御野立

今川村 塚本休右衛門

御一泊

暮戸会所

輪番三州暮戸迄御見送申立候事

丙第四号

明治六年五月

大教正近衛殿神道御派出ニ付、於当管利三日之間説教有之候事

丙第五号

明治六年八月

高田常盤井大教正殿御入候之時歟
日限等可謂事

甲第七号

明治六年十二月廿五日、御帰西之御御立寄

大教正殿

御供方

憶念寺 無量寺 閑唱寺

浅井 野崎 川那部

小谷 安原 堀場

久藏 憶念寺 從者壹人

友助 彦吉

陸尺 七人

足付人足 九人

御休泊左之通

廿四日

御立 藤川

御小休 岡崎

御小休 暮戸

御一昼 池鯉鮒木綿屋

御小休 前後 三田無忍

御一泊 鳴海本町綿
屋御門徒 鬼頭庄藏

廿五日

御小泊 熱田肝煎 源田清左衛門

午前第十時頃

管利御着
御一泊

廿六日 晨朝御出仕夫の御發途

御小休 改官の福田迄
三里七丁五十九間

管利より一里余り
熱田新田八九ノ割

説教所

東起村 一里余り

御小休

①橋ニナル下ノ一色村
十三町

某

①橋ニナル 福田新田
一里余り

御昼

服部治郎右衛門

改福田の前ヲ須迄の福田川
二里十二丁卅七間①善太川

一里余り

御小休

東鏡村 某

①橋ニナル
半里計

島ヶ地新田

半道計

六条新田

一里

押

前ヶ須 十三丁

御小休

佐藤七三郎

前ヶ須の桑名江御
乗船

真宗大谷派名古屋別院

〔從明治十四年御成記〕
至明治十七年

此節歎、先年ヨリイヌイ村辺の引舟とか申多人数ハタカニテ川江入舟ヲ押候
事有之処、当時勢ニ付夫ヲ為改候而、佐藤七三郎屋江入別段右等之同行
丈御礼有之候様取計候事

輪番役僧名桑名江御見送申上候事

乙第二号

明治七年二月十一日

御連枝正院殿御東上ニ付御立寄

御附

吉田

御生母 唐崎

下男一人

外四日市信光寺当管利迄御随行被申候

十二月の十四日迄於本堂

御説教有之 神守 養源寺勤之
引次 説教

右御東上ニ付、暮戸豊橋聖源寺等御道筋御説教有之候ニ付、御休泊周旋

旁為御案輪番御随行、豊橋迄御見送申上候事

甲第八号

明治七年七月歎

御法嗣殿

御東上ニ付、当管利御立寄願旁勢州桑名四日市辺御出合申上候迄、輪
番并ニ役僧行円寺出頭致候処、俄ニ四日市宮江御渡海ニ相成同所御小休、

夫^の鳴海駅御一泊^ニ而御通行被為有之候事

同年九月

御詳行被為之事

供奉人

加州永順寺石川舜台

同 本誓寺 白花

東京 成島柳水

三州安休寺安藤劉太郎

甲第九号

明治八年一月廿六日、西京御發駕^ニ而御東上

御法主殿

右^ニ付以電信御發途且御道筋西京^江伺之上、輪番^并寺務方役僧祐誓

寺東海道関宿御昼迄、御出迎旁御立寄御滞留願立候事、左^ニ別紙之

通諸事奉伺候

再心御逗留願

大御法主様御立寄被成下、御門末一統難有仕合奉存候、就夫奉願上候儀

者、此度両御法主殿当所於御管利三日御逗留且御説教可被為在風聞在之

候、折柄^ニ候得者甚々奉恐入候得共、右御同様御逗留^ニ而御門末一同^江御

化導被成下候^ハ、如何計難有可存候、万一明日早天御發途^ニ被為在候^而者、

実^ニ歎^ケ敷奉存候、右願之通御申上奉願上候也

勝手方講中

明治八年一月

普請方講中

正念寺殿

口上書覚

一、先般^の飯県庁^ニ貸渡有之候得共、本堂^ハ勿論御居間其外御休息所^并御

供廻^リ等居処御差支筋無之事

一、御道筋之義者、佐屋街道奉伺候事

但焼田御上陸別紙^ヲ以申上候

一、大門西柵門^の御步行奉願上度候事

一、本堂正面^の御上^リ演椽西^江御廻^リ後堂^の御廊下御居間^江

一、御一泊候得共、御着直様御出迎法中惣請中御礼奉願度候事

但御滞留被成下候得者、従前之通御礼奉願上候事

一、晨朝御出任御伺^并勤行式之事

一、御滞留^ニ候得者、諸願御聞濟伺上候事

御供方

内事長 万徳寺 長 円立

納戸係^リ 無量寺 柏樹誓覚

長堅寺 長沢祐言

西宗寺 藤村広顕

近習 川那部十左衛門

稻波勘三郎

竹内智清

納戸係リ

堀場宗次郎

医師

安原一郎

万徳寺從僧 仏願寺新發意

諸国世話方老人

鎗頭 久蔵

熊助

常吉

敬太郎

メ拾五人

陸尺 七人

足付人足 十人

下拾七人

惣メ三拾貳人

廿八日御泊リ

庄野駅

廿九日御一泊

桑名管利

一、同所ニ於テ上局ヨリ御達、佐屋街道新街道両方ヨリ御途中ニテ彼是苦情有之候而ハ可奉恐入義ニ付、佐屋街道今般御通行相成候而度外ヨリ決而苦情無之哉、入念御尋有之輪番ヨリ御請書可差上様御達ニ付、直様前ケ次江引取リ僧俗遠示談、左之通別紙即刻桑名管利江立帰リ差上候

願

今般御法主様御東上ニ付、名古屋管利江御立寄被成下難有奉存候、夫ニ付御通筋之義ハ、桑名港ヨリ御乗船前ケ須港江御上陸同所ニ而御小休、夫ハ佐屋街道御通行被成下度、双方熟談之上奉願候間、此段宜御申上可被下候、右願之趣御聞届之上ハ双方共彼是申上候儀ハ決而無御座候、依テ連印ヲ以テ右御取計之段奉歎願候也

八年一月廿八日

前ノ須同行惣代 河部長三郎

佐藤七三郎

福田駅

服部宅左衛門

新街道法中惣代 安法寺

佐屋街道惣代 万瑞寺

西光寺

稲葉村

名古屋管利

輪番 正念寺殿

別紙之通奉歎願候義ハ、此度限リ之事ニ御座候ニ付、已後右確書ヲ以先例杯申立同行ハ強願等決而為致間敷候間、此度之所宜被仰上御聞届相成候様奉添願候、為其如件

名古屋管利輪番

伊地知覚準

御旅中

寺務所御中

三十日

桑名管利御発途

桑名ヨリ

御乗船

御上陸

前ヶ須

御小休

同所 佐藤七三郎

御 昼

佐屋 加藤五左衛門

御野立

津島東 追分

御小休

神守 後藤豪之助

御小休

万場 桔梗屋某

万場川船渡

同所 管利迄人力車

三門ヨリ本堂向拝迄輪番御先乗

本堂正面向拝ヨリ御上リ外椽西江御廻リ、後堂の御居間江御案内申上

候事

引次暫時御休息

本堂御拝礼御参堂有之

引次法中肝煎始惣講中惣礼有之

三十日

晨朝御出仕

八時御案内
九時御出仕

同日

十一時昼御膳
十二時御発途

御小休

熱田 桔梗屋

御小休

鳴海 加藤平五郎

御小休

阿野 三田無忍

御泊

知立 木綿屋

輪番役僧同所迄御見立申上候事

乙第三号

明治八年五月廿九日

弥姫様御立寄有之

此書状来ル

先以其管利無御別異奉恐悦候、扱御法主様御三女弥姫様御事、今度御帰西ニ相成申候ニ付、本日宮駅御泊リニ被為在候間、其御坊御参詣ニ御立寄被遊度候故、宜敷御承諾御執計被下度候、此段御依頼申度候、早々頓旨

弥姫様御随従

五月廿九日

松井元長

名古屋管利

正念寺殿

尚弥姫様ト申御方ハ、先年来ヨリ久我三位様へ御縁組ニ相成申候御方ニ御座候間、此段島渡御心得迄申置候也

右之通、松井殿へ報知有之候ニ付、早々熱田江勘定方吉田綱太郎御迎出頭致シ、当管利江御案内申上御一泊相成候、翌三十日新街道前ヶ須へ御見立御小休等万端不都合無之様、森島七郎江申付御供五名送り人共人力者ニ而御送申上候、同所へ桑名江御乗船之事

甲第十号

明治八年六月

大教正殿御帰西ニ付

御旅中寺務所^ハ左之通御達

大教正殿去^ル廿四日御機嫌^{にて}東京御発途被為在候、然^ル処寺務方随行無人ニ付、^ハ兩三日臨時御守衛御供被申付候条此段相達候、右ニ付来^ル三十一日浜松宿御立同夜赤坂駅御止宿之舌^ニ候得共、若新居出船不致候節者豊橋御止宿ニ相成候も難計、此段相心得兩所之内^江無相違出頭可有之候也

猶々前文之通、御道中御無人ニ付、御旅中御供被申付候間、早々出頭可有之候

相州小田原宿ニ而
旅中

八年五月廿五日

寺務所

尚々其管刹御入輿前在坊無之不都合ニ候ハ、其旨御途中^江至急出頭御断可被申上候也

右之通御達ニ付、別院用意等申置三十日^{ヨリ}御迎出頭致候、三十一日豊橋御泊^リ之処大井川^{ニ而}半日余川留^ニ付、六月一日浜松駅御立^{ニ而}同日赤坂駅御止宿ニ相成候

二日

赤坂駅御立

御小休

暮戸

真宗大谷派名古屋別院【從明治四年御成記】
至明治十七年

同

知立駅

御昼

阿野村 三田無忍

但例之通中島金石衛門ヨリ御調進申上候

御泊

鳴海駅 野村うた

加藤平五郎方へも兩三人
下宿下男八崎下宿

三日

御小休

熱田肝煎 源田清左衛門

午前十時過

管刹御着

一、赤坂駅御一泊之節

明二日鳴海御一泊御治定相成候ニ付、同所^{ヨリ}夜中鳴海^江参^リ臨時御宿本周旋致シ、左之図面^ヲ以^テ直様立歸^リ、翌朝岡崎^{ニ而}御出合篤^与申上、同家と御治定相成候也

(図面省略)

御供奉人

隨行長 長 円立殿

同從 僧 老入

長沢祐言

川那部十左衛門

稻波勘十郎

竹内知信

堀場宗次郎

医師 安原一郎

佐々木久藏

寺務所下男

三人

棒頭

一人

陸尺

六人

足付手人

拾人

廿九人也

明治八年五月

万瑞寺住職

伊藤祖白 印

西光寺住職

服部成正 印

同行惣代 佐屋村

三輪源兵衛 印

服部富兵衛 印

万場村
法中惣代

光円寺

花園顯龍 印

同村
同行惣代

佐藤佐兵衛 印

宮松伝兵衛 印

神守村
法中惣代

養源寺住職

神守空観 印

神守村
同行惣代

伊藤浅右衛門 印

御輪番

伊地知覚準殿

一、同夜十二時頃ニ漸ク事治リ御道筋御治定無之ニ付、書面ヲ以御道筋内

一、御着院後暫時御休息有之

次ニ惣法中肝煎諸講中、例之通於広間惣礼有之

一、御道筋之儀ニ付、美濃国同行惣代六七名遠州浜松迄御出迎旁伺出、

是非今般美濃路御通行被成下度旨強願申出候

当国同行ハ、新海道又ハ、佐屋海道之内御通行被下度旨強願申出候

一、上局ハ輪番呼掛ニ付頭候処、同行ヨリ御道筋之義強願申出候処、今

般御手許御急キ被在候御都合モ有之ニ付、御道筋之義ハ御法主殿之思

召ニテ御通行被遊候御事ニ付、双方共願立之義ハ決テ御採用無之旨ヲ

以テ可相諭旨御達ニ付、重々及説諭漸ク鎮撫相成候事

一、右ニ付同行ハ左之書面差出候

今般御法主殿御西上被為遊候、夫ニ付御道筋之義双方ハ段々奉願上

候処御採用無之、御上様之思召ニ而御通行被遊候趣御理解ヲ蒙リ奉恐

入候、依テハ何レヲ御通行相成候共聊苦情申立間敷候、此上ハ若一外

同行共ハ彼是申出候共、連印之者ハ及理解決テ御差支筋無之様可仕

候、乍併昨年両街道僧俗一同熟談之上奉願置候通、一度替リニ御通

行被成下度、左候得ハ国内同行不洩御化導奉蒙度候間、此段宜御取

計被下度、連署ヲ以前条奉願上候也

海東郡三日講
法中惣代

伺申上候処、新海道与御治定相成候ニ付、即刻台所取次役中島吉兵衛
外同行貳名附添御道筋見分旁御休泊等周旋之為差立候事

三日 御速夜 御出仕

四日 晨朝 御出仕

同日 日中 御不参

同日 午前十時 御昼御膳

同日 午前十一時 管利御発途

御小休 熱田新田 当院所屬
八九ノ割 誤教所

御小休 東起村 苗字伊三郎

◎橋ニ相成

御昼 下ノ一色村 某

◎

御小休 福田新田 服部宅左衛門

◎福田川

◎善太川

御小休 西見村 志水太重郎

◎孫宝橋ニ相成

御小休 前ノ須駅 佐藤七三郎

但前ノ須佐藤七三郎方御小休之処臨時御止宿ニ相成候也

五日 早朝御発途

御乗船 前ノ須
桑名江

真宗大谷派名古屋別院 從明治十四年御成記

同日 桑名管利御立寄之処御急^キニ付御着直様僧俗一同御礼引次

御親教 有之

演説 名古屋輪番相勤候様
殿命ニ付伊地知覺準勤之

御親教過直様御発途

同日 御泊リ 龜山駅

同日 同駅御泊リ迄名古屋輪番覽立申上候

六日 御泊リ 石部駅

七日 御帰山被遊候也

甲第十一号

明治九年六月從一日至五日

御法嗣殿御成在之候事

右者無碍光院殿御法事御執行ニ付、御下向願手順左之通候也

御願

御本山両御法主殿御機嫌能被為遊御化導一同奉恐悦候、就而者近頃大御
法主様近国御巡化被為遊候趣、依而者新御法嗣様御洋行以來御立寄無之、
御化導ニ相洩同行歎ケ敷奉遊候、就夫此後若哉御東上之砌当国御巡化奉
願上度候得共多分ニ而奉恐入候間、何卒当御管利御立寄七日之間御滞留
御化導奉蒙度一同懇願ニ付連印ヲ以奉願上候、此段御願被成下候ハ、難
有仕合奉存候、以上

明治八年十一月

惣同行中

町在
八郡

總代 新海新兵衛 印

鈴木是教 印

御輪番

正念寺殿

御本山御別条無之奉恐悦候、然者新御法主様御洋行以來御通行_モ被為在候処、御渡海_{而已}被為遊当国御立寄_モ無之、御化導_ニ相洩肝煎惣同行共深ク相歎_キ、此度別紙之通手許_江御東上之砌御立寄奉願上吳候様申出候間、此段宜敷御申上被下度只管奉願上候也

名古屋
管利輪番

伊地知覺準

八年十一月廿日

御本山
寺務所長

議事篠原順明殿

書面御立寄願之儀_ハ、御発令之上申立候義_ト可相心得候、依_テ書面返却_ニ及候也

御本山御別条無之奉恐悦候、然者新御法主殿御東上之砌当管利御立寄御化導奉蒙度旨、町在同行中_{并拙者}。昨年十一月願上候処、右書面御返却_{ニテ}御発令被遊候上可申立_トの御指令有之候、然処今般別紙連署_ヲ以再応願上吳候様強_テ申出候間、何卒右願之通_リ御聞濟被成下候様、宜_ク御取計之程奉添願候也

明治九年一月十二日

伊地知覺準

御本山
寺務所議事

篠原順明殿

追啓

別紙御法事願之儀、当管利者一如上人御創立_ニ付格別町在同行数年之懇願_ニ候得者、何卒今般百五拾回忌三昼御法会御執行被成下候様仕度、此段只管奉歎願候也

但本文御許容被成下候_ハ、御法要式以書面早々可奉候候也

今般岐阜県下_江御法嗣様御下向被為在候御内定有之趣、去_ル十二月西上仕候銘々承知仕候、就_而者隣国御通行_{ニテ}万_一当国御管利_江御立寄不被為在之候_而者、御門末人機相立可申哉_ニ相心得申候得者、右之趣御本山_江御願立被成下、当管利_江御立寄_{ニテ}御起立被為在候、一如様御法事御執行奉願上候、右願之趣御聞濟相成候得_ハ、御門末一統難有可奉存候、宜御申上奉願候也

明治九年二月廿五日

森 勝右衛門

笹野太右衛門

柴山金右衛門

安藤太兵衛

谷 伊三郎

鈴木是教

新海新兵衛

森 甚助

松永弥九郎

御輪番

正念寺

伊地知覚準殿

外ニ輪番添書ヲ以テ例之通願出候事

二月廿五日附ヲ以、惣代連署之願面一如上人御法事云申立候趣開申被致候処、右者今般之御派出ハ岐阜県并三重渡会之三県ニ限リ候条、右惣代連署出願之書面一先及返却候間、其旨懇諭可有之候也

本山寺務所

九年三月二日

処分課 印

名古屋管利

輪番

伊地知覚準殿

明治九年四月

御開扉御用有之御召ニ付、同月十六日京急御届在京中、左之通願立候

御法事御執行願

当管利御起立一如上人百五拾回御忌法事爾今御延引相成一同歎ケ敷奉存候ニ付、昨年来追々願上候通新御法主殿御洋行以来当管利御立寄無之ニ付、五月一日ヨリ六日迄五昼夜御法会御執行被成下御化導奉蒙度候、右之趣只管御願上被下度連署ヲ以奉願候也

市在八郡惣代

明治九年四月

御輪番

伊地知覚準殿

添書

当管利町在肝煎同行ヨリ別紙之通り可奉願上旨再三申出候、尤御日限之儀者思召ヲ以御治定被為遊、何卒右願之趣御許容被成下御執行相成候様、添テ奉願上候也

明治九年四月十九日

名古屋管利輪番 伊地知覚準

寺務所長

権中教正篠原順明殿

右願書御預リ同月廿三日寺務所。即刻出頭可致旨御達ニ付罷出候処、御法事御執行御聞濟ニ付、勘例早々可差出様御達ニ付、於別院一如上人御法事并御代御法事御執行有之分猶近来達如上人御七回忌御法会等取調勘例差出候

一、御法事御日限相伺候処、六月一日ヨリ四日迄三昼夜御執行被為遊候旨御達相成候事

右ニ付追々左之件々相伺承事、掛役江御照会申候事

御法嗣殿御法具類

御経 御和讃 御柄香炉 御草鞋 総テ御依用品等

御連枝御參勤有無伺

御法事ニ付掛役人名伺

誰々 印

上首座配人名伺

伽陀師 教円坊

御草鞋役并配撤人名伺

桑名輪番 長覚寺

堂僧參勤之人名伺

長浜輪番 法光寺

并三等衆座席帳御入用ニ付御本山之御記録之内ヨリ尾濃三三ヶ国拔書之

兼書記 憶念寺

義筆料差出書記方エ相頼、右御持參相成度旨聖徳寺江頼置候事

惣從者 老入

御法具御長持始御荷物

一、御法要前本宗寺殿憶念寺殿下向ニテ諸事取計有之候事

五ヶ寺衆并參勤裝束長持

一、尾濃三三ヶ国三等座席等取調方并認物等へ付、当国中島郡野府村円光村御頼入之事

迎人足人数等万端在京中相伺、猶御法事勤行式等御治定之上御日限前

一、御法具御長持御荷物掛役等之長持、五月廿五日別院着相成候事

掛役下向有之、万件御指揮可相成趣ニ付御談示之件々委細承之御用濟

一、御法事勤行式并配役等、左之別院之通、依略之

婦院致シ御待請申上候事

但別記後ニアリ

一、御法事ニ付御連枝掛役參勤之人名往復旅費等之次第、大録事白川慈

同年五月

弁殿ハ御打合ニ付、委曲申上御取極之趣意承之置候事

新御法主殿伊勢国御派出之砌、先駆役ヨリ左之達有之

一、御法事ニ付參勤人名、左之通御達之事

至急用向有之候条、来ル廿七日四日市信光寺エ御法嗣様御着與相成候

大垣連枝

間、同日迄ニ該寺エ出頭可有之候、此段相達候也

敬信院殿

先駆

從僧列座貳人

少講義長沢祐言

河州

願得寺殿

五月廿日

名古屋管利
輪番

從者 老入

伊地知覚準殿

美の平尾 願証寺殿

右御呼掛ニ付出頭候処、口達ニテ左之趣御達有之

勢州井沢 本宗寺殿

今般其別院御法会御執行ニ付、来ル六月一日桑名別院御発途ニテ御入輿被

從者 老入

遊候事、但追々当国御巡化御疲勞被遊候^ニ付、初逮夜多分御不參之御事^ニ候、就^レ前者大垣御連枝御參勤之事^ニ候得^ハ、御着坊之節混雜無之様、兼^テ時尅見計初逮夜相始候旨御達有之候
右^ニ付歎願之趣意

今般希成御法会御執行^ニ付、昨年来当国僧俗一同唱望御待受奉申上候処、初逮夜御不參被遊候^而ハ、誠^ニ以歎^ク數奉存候間、御疲勞之段奉恐人候得共、何卒御出仕被遊下候様奉歎願候処、御疲^ニ付御聞濟無之事
一、五日御發途被遊候趣御達^ニ付、直様御滞留被成下度旨立^テ奉願上候処、御聞濟相成候事

一、其節左之件々御伺旁上申仕置候事

奉伺手続覚

六月一日

桑名^{ヨリ}御渡海被遊候哉

御小陸

宮駅

御小休

肝煎 深田清左衛門

附家内御礼

宮駅^{ヨリ}管利^江

御馬乘 奉願上度候

臨事御伺

但御輿外御迎<sup>人力車拾八挺
人足廿五人</sup>可差出候事

管利大門^{ヨリ}

御步行 奉願上度候

臨時御伺

真宗大谷派名古屋別院

【從明治四年
至明治十七年御成記】

管利當時仮県庁^ニ付

御入輿之節本堂正面^{ヨリ}後堂門廊下御居間^ハ

一、御着坊後

本堂御拝礼有無奉伺候

一、他流^ヲ始惣出迎御待受之者^江御礼^{臨時御伺}

御滞留中

御染筆願

御剃刀^并御盃願

申経願

二日晨朝過

御直命御法事^ニ付奉願度

臨時御伺

一小数校設置係^リ役御達通呼掛置候事

同日願人有之候時者

逮夜過

御盃 奉願上度

臨時御伺

三日晨朝過

御剃刀 御免奉願度

臨時御伺

日中過

三等法中^并町在惣法中御礼香部屋^ニ而^{臨時御伺}

四日晨朝過

御剃刀願人相殘候時^ハ御免奉願上度

臨時御伺

同日中過

御満座御礼

町在惣法中

町在肝煎中

諸講中

右奉願上度

臨時御伺

五日晨朝過

御礼

諸講中前日御礼
相渡候時奉願上度

臨時御伺

御直令 教校設置御趣意刻限

臨時御伺

御直命後引次

御盃 御免奉願上度

臨時御伺

西派高派并御懇家衆江

御礼 右御法会中奉願上度

臨時御伺

六日

御発途 御入輿之節之通御通行奉願上度候

三日ヨリ 四日迄

御精日

一月五日六日

平日

右奉伺度事

右伺奉リ候処、左之通御口達

一、桑名ヨリ 宮駅江 御渡海御治定之事

一、宮駅御小休并 御着坊等申出之通

一、御着後本堂御礼尤アリ

一、御染筆願

一、御剃刀并 御盃願御聞濟之事

但御法会中ニ付申経無之

一、其余件々御着坊之上御治定可相成事

内伺

御染筆物御礼之事

九十字御名号

貳分貳朱

法名夫婦一紙

金壹円

御剃刀

下金百疋已上

御盃

金貳朱

甲御経

金千疋

但御盃願多分ニ候得者土器用意有之度事

外黒家附貳 借用申度頼談有之

御法事中御精進一日五日六日ハ 魚物ニテヨシ

御供人数

随行长

円重寺 鈴木恵淳殿

御旅中寺務所

恵見竜円

同

皆円坊 浅井義夫

先驅

長堅寺 長沢祐言

同実父病氣ニ付御着坊之上退後

長休寺 小川円諦

度支

川那部証空

隨行長從僧

笠原周清

近習

松井

同

稲波

同

淺野

醫師

小森

說教者

福田覺成

會計

小川徳三郎

仲番

久造

近習

下男六人

陸尺五人

御法事中

三日月中過

御直命 僧俗一般江

四日月中過

御剃刀 凡貳千五百余名

三座有之

引次御礼

三等并惣法中前日御礼有之旨張紙出之

次御礼 肝煎始詣講中

五日晨朝過

御礼 諸講中之内相殘リ分更ニ願之分共 於対面所

真宗大谷派名古屋別院【養明治十四年御成記】

御出掛御礼 成瀬家 於古御殿エンコウノ間

次御盃御礼 於香部屋

次御剃刀 凡男女三百余名

内廊下ニテ御通り掛御礼 女人同行

次御直命僧法中江於香部屋 小教校設置之御趣意

次御直命 僧俗一般江 御法事無御滞被為濟候御趣意

次御礼 惣同行江 於対面所

御入掛 羽城同行江 於古御殿

其外御礼他流法中同行并御懇家衆

別段御礼願之分ハ御法事中御參堂掛且御引取掛

其節々臨時伺之上時々有之候事

同六日午前八時

御発途 馬乘

御小休 熱田栢裡屋 土屋喜七

但同所ニテ御礼 熱田十二日女人講中并羽城同行中

御小休 鳴海宿 野村うた

御小休 阿野村 三田無忍

御小休 三州暮戸会 所

輪番役僧御泊迄御見送申上候事

知多郡 森田氏所藏

蔡道憲之掛物

外ニ写真貳枚

半田 榊原銀作所藏

黄道周之 岩ニ老松之図

右写真壹枚外写真四冊ヲツ入

右之書画御所望ニヨリ御覽ニ相成候事

乙第四号

明治九年四月

三州赤羽管利御遠忌御執行ニ付、御法主殿御代理撰光院殿御下向

但北国ヨリ信州州坂勝尊等へ御向
夫ヨリ信州路赤羽御通行相成候事

御法要ニ付用掛リ、左之兩名西京ヨリ前以出頭有之事

用掛リ 融 了瑞

兼輪番代 藤居了俊

撰光院殿隨行左之通

泉 祐義

清水流之助

野崎瓊郎

小川篤三郎

山口利助

北村榮藏

下男彦人

右赤羽管利ハ明治五年ヨリ拙者兼輪番被命奉職中ニ付、兼テ御法事御執行

願論ハ致候得共、当別院於テ數職被申付出張難致旨上申仕候ニ付、右御法要中為輪番代藤居了俊御差下有之候、依テ御法事前日ヨリ寺務方役僧大成寺御機嫌伺旁為輪番代出張為致御帰山之砌、当管利江是悲御立寄被成下度旨、委曲書面ヲ以上申仕候処、左之通御報知有之候也

但其節金五拾錢管利エ香茂輪番ヨリ差送リ候事

如来示残暑難去候処、先以權中教正殿御機嫌能御着利ニ相成御同慶申上候、夫ニ付為御機嫌伺役僧指知之上、其管利江御立寄云之義、委曲御申越相成詳細及上申候、然ル処御賢知之通、山科大谷両管利報恩講切迫之處、右日限迄ニ是悲御帰省可被成御事故、此度之義ハ御断被成度尊意ニ候条、不惡御承諾可被下候、詳細役僧エモ申入置候間、該人ヨリ御聞取可被下候、此段御回報申進候也

九年九月十六日 大谷權中教正殿御隨行 泉祐義

名古屋管利輪番

伊地知覺準殿

同月廿四日

撰光院殿御帰省ニ付

御一泊 熱田 山城屋

同所江為御機嫌伺輪番出頭、左之通献上致候事

金五円 御連枝様

金三円 御供中

金壹円 山城屋会釈

廿五日同所ニテ御見立申上候事

但福田御小休送人力御荷物人足共
当符利御見送申上候事

甲十二号

明治九年子十一月

御法主殿從朝廷御召ニ付、至急御東上之事

本山ヨリ別段御達無之、其筋ハ御道筋東海道十一月廿二日三日頃当地御

通行之由内輪通知有之、依テ肝煎始同行エ及示談、御立寄願書持參御迎

旁桑名エ向、廿二日輪番役僧出頭掛福田新田ニテ御出會申上、御小休油

屋吉之助方ニテ伺御機嫌并御一泊奉願上候処、火急之御東上ニテ付御聞濟無

之、追テ御帰山之砌ハ其都合ニヨリ御立寄被遊候との御事ニテ、直様御立御

昼熱田駅山城屋ニテ緩ニ御対願有之、左之通献上

金五円御菓子

御法主殿

同五拾錢同

隨行長 長田立殿

廿二日御泊

三州岡崎駅

今般ハ御急ニ付御輿無之、御法主殿始御供不殘人力車ニテ御通行、輪番役

僧前後迄御見送申上候事

甲第十三号

同年十二月

大御法主殿詮号官旨管守ニテ東京發途御帰山ニ付、別院御立寄同月十五

日御一泊被為遊候旨、御旅中ヨリ御通知有之

十二日豊橋、十三日岡崎、十四日知立、十五日別院御着、十二日ハ豊

橋江御出迎輪番役僧出頭之事

供奉御人数左之通

隨行長 田立殿

寺務所

渥美契誠

同 浅井義夫

同

佐々木誓鏡

近習 川那部十左衛門

同

野崎參吾

醫師 斎藤政了

勘定方

大路松次郎

鐘頭 佐々木久造

僕 三人

諡号官旨唐櫃持 四人

御輿之者 六人

御小休

阿野 三田無忍

同

鳴海 野村宇多方歟

同

熱田 肝煎

別院御着

御參堂相濟 法中肝煎諸講中例之通御礼有之

十六日 晨朝御出仕

御立懸 前日相洩レ候諸講中エ御礼有之

御道筋別院ヨリ前ケ須東海道御通行之趣ニ付、熱田新田八九說教所東起

西福田服部宅左衛門西覬志水太十郎所々ハ御小休願候処願書返却相成

候、右者美濃国同行數十名豊橋江御出迎致出頭、往々東海道計御通行ニ

付今般ハ是非共美濃路御通行被成下度旨御旅中於テ追々願出候ニ付、名

古屋別院御着之上御評儀可有之由御申聞_ニ付御着後強願候間、十五日夜

御連枝中教正大谷勝縁殿

御説諭申之事故何_レ茂願書差戻相成、十二時_ニ至_リ御治定無之輪番段々御

從者大東賢成

内意相伺候処、午前二時頃左之通御確定相成_ニ付、寺務方役僧住田惠見

僕 忝人

外講中老名即刻新街道筋御小休御昼前_ケ須_ル佐藤七三郎方臨時御一泊被

少教正篠原順明殿

遊候旨為通知兩人差遣候事

從者 忝人

御野立

八九説教所

權少教正長 円立殿

御野立

東起村

從者 忝人

御昼

福田 服部宅左衛門

同 蓑輪対岳殿

御小休

西親 志水太十郎

從者 忝人

御泊

前_ケ須 佐藤七三郎

度支權中講義録事経塚寿慶

十七日朝

僕 忝人

御乗船同所_モ桑名_江御渡海、輪番桑名迄御見送申上候事

先駆役 少講義録事惠見龍円

丙第六号

監正役 權少講義 白尾厳雄

明治九年_子十二月十六日

御旅中寺務所_同 承_事 沢 実温

西本願寺大教正殿御東上_ニ付、熱田駅御一泊相成候、山城屋_{ニテ}、例之

同 同 同 藤井了俊

通御機嫌伺出頭之事、但輪番桑名_エ御見立_ニ付代理役僧罷出候也

同 同 同 大淵堪了

甲第十四号

同 同 同 武田神哲

明治十一年三月

同 同 同 天野神海

謚号供養会御法要、前住上人御十三回忌御法事

同 同 同 佐々木信成

右御執行_ニ付、御法主殿御下向

同 同 同 服部誠言

御随行人員

同 同 同 僕 三人

説教者 立川賢隨

從者 野崎參吾

竹内知信

苗村精兵衛

僕 三人

醫師 齋藤安行

僕 老入

會計 堀場宗次郎

諸国詰合 射水伊三郎

中番 北村桑三

陸尺 六人 居逗留

隨行長駕 三人 居逗留

人力車引 足付拾苞人

諸国同行^二而御手伝 拾人
京都召進入足

御法要役員

式事

近松巖誓

承仕

同

大華懷雄

書記

書記

鈴木信慧

藤沢了覚

堂達兼伽陀師 立花惠深

參務堂僧 稻沢了岸

正田秀含

高橋休心

愛宕富明

万年專順

御道筋左之通

三月八日 西京御発輿

十日 御一泊 大垣

○佐渡川アリ

○北川アリ 二里

○長良川アリ

御小休 墨俣

○木曾川アリ 二里半

御小休 起宿 菅里

御 昼 萩原 菅里半

御小休 稻葉 菅里余

御小休 四ツ谷 二十

御小休 清洲 一里

御小休 枇杷島 二十丁半

御小休 巾下町 廿丁余

別院御着

御荷物

籠長持 貳棹 人足八人

両掛 四荷 人足八人

外二同行持

両掛 八荷 スケ人足

起駅迄御迎人足車并人足差出候事

御先輪番人力車

前引貳人
後押貳人

次ニ承事車

同断

次ニ隨行長車

同同

次ニ内事従者車

御車

前三人
兩脇守後貳人
後貳人

内事長車

貳人引

御連枝様御手車 前貳人
手人壹人 後貳人

同日午後七時頃御着

御成中御礼有之

教務取締中

組長中

視察中

惣御末寺中

町在肝煎中

普請方中

勝手方中

諸講中

成瀬正直殿

岡田徳右衛門

高田
輪番

同
肝煎兩人

西派
輪番

同
列座兩人

御道服
御五条御寄附へ付
巾下四日講中

海東郡同行

海西郡同行

中島郡相統中

下ノ一色 同行中
正雲寺

羽城同行中

十七日 小教校生徒
学業 御親覽有之

十六日 帰敬式

十九日 同

十七日 晚香堂
御茶献上伺済

其外臨時御礼数度有之候事

- 一、御法要ニ付御下向願并用意方等手続之書類ハ別段綴込一冊有之
 一、御法会御記録部御下附之義願上到着ニ付別院ニ入蔵有之事、依略之

一、同月廿五日 別院御発興

新海道 御通行如例

同日桑名御着該院ハ一同御見送申上候、桑名別諡号会ニ付參勤被申付、夫ハ岐阜別院江御連枝御成ニ而諡号会御執行ニ付參勤被申、夫ハ赤羽別院諡号会ニ付出頭候事

丙第七号

明治十一年十月廿六日

高田大教正殿当地高田別院ハ御立寄ニ付、例之通り輪番并寺務方役僧御機

嫌伺出頭之事

御駈轡第一

明治十一年十月

御巡幸御行在所被仰付

御着輦 廿五日午後五時從岐阜県御巡幸之事

御巡覽 廿六日午前八時御出門県庁始病院博物館等

同 廿七日午後九時御出門鎮台裁判所諸学校等

御發輦 廿八日午前七時

天機御窺之為兩大教正殿御代理權少教正衰輪對岳殿出張有之

高田大教正殿御窺御出張相成候也

一、御行在所ニ付、御紋付銀盃三ツ重巻箱入下賜候事
金百五拾円也

甲第十五号

一、明治十二年二月

御法主殿御下向御立寄之儀左之通り御達有之候

名古屋別院

法主殿豊橋別院再興御親諭之為、二月廿日頃御發途ニテ御下向被為在候ニ付テハ、其別院ハ巡路御立寄親教被遊候条、門末一同ハ兼テ通知可致置、尤御滞留中饗応向等ニ付格別之配意ニ不及候間、諸般質素ニ取計候様可致、此段相達候事

但御發途日限之儀ハ確定之上更ニ可相達候事

執事

明治十二年一月廿九日 少教正篠原順明

一、二月十日先駈佐々木祐寛沢実温兩名別院ハ着翌日三州路ハ出頭相成候

一、二月十二日附ヲ以テ左之通照會有之候

赤羽別院儀者新輪番ニ而承事不都合哉ニも被在候間、夫就各様次第ニ候ハ、名古屋輪番江諸向万端指揮可為致旨、兼テ執事殿ヨリ被相達候次第有之、昨日該院ハ着之上夫々相談候処果テ不都合不少候条付而者、執事殿ハ達之旨有之候付、御繁忙中定而御困却ト惡察致候得共、御手隙之際該院ハ御出張被成ハ、事、可然御指揮有之度候也

御下向掛

二月十二日 佐々木祐寛

泉 祐義

名古屋輪番

伊地知覚準殿

一、二月十五日赤羽別院江懸飛脚ヲ以テ輪番或ハ寺務方之内名同行兩名即刻呼掛候処、十七日寺務掛願海寺并肝煎貳名參院ニ付、今般御成ニ付用意ヲ始、当日御出迎御見送迄之順序次第可書取承件申談遣シ候事

一、十六日先驅宮駅左之通頼談書来ル、拙者共急場ニ而本日熱田港ヨリ乗船ニ付、其別院江も不立寄直ニ帰京致候ニ付テハ、兼テ御依頼及置候阿野三田并鳴海宿小休定テ治定相成候哉、且福田油屋前ケ須佐藤之二ケ処も乍御手数御打合被成、廿日迄ニ四日市宿帯屋七郎右衛門方へ向、拙者共宛ニテ御郵報相成度、此段御依頼申候也

先驅役

二月十六日 沢 実温

佐々木祐寛

伊地知覚準

一、十八日寺務方役僧祐誓寺ヲ以テ御小休等夫々打合ニ遣候事
一、十九日早朝御小休之儀過日御照会ニ付、左之通治定仕候旨以書面四日市駅帯屋七郎右衛門方へ向、先驅兩名宛ニテ及上申候也

廿三日

御小休 前ケ須佐藤七三郎

御小休 福田新田坂野吉之助

御着 別院

廿四日

御小休 熱田駅 沢田清左衛門

鳴海駅 加藤平五郎

東阿野 三田無忍

一、廿二日桑名別院へ御出向之砌、左之願書差出ス

第壹号

添願

別紙之通奉願上度旨強テ申出候間、御憐察之上御聞届被成下度、此段添而御願申上候也

名古屋別院輪番

明治十二年三月廿二日 伊地知覚準

御隨行長

少教正篠原順明殿

願

今般大御法主殿三河国御下向ニ付、名古屋別院御一泊可被為在旨、御門末一同兼テ御待請申上候付、極メテ群參ト奉存候、就而者御參堂而已ニテハ拜礼漏之者不少ト歎ケ敷儀ニ御座候付、恐縮之願品ニ者御座候得共特別之御憐愍ヲ以、左之御聞届被成下度厚ク奉願上候、因テ左ニ

一、本月廿三日御入之上御參堂之節、対面所^{ヨリ}御出仕御椽行之上、御參堂被成下度候事

大野仲右衛門
石原久三郎

一、同日御參堂被為濟御退降之砌、対面所^{ニテ}御門末一同之御札御請被成下度候事

御隨行長

少教正篠原順明殿

一、翌廿四日朝御參堂御還之砌、御堂御椽行^{ニテ}対面所^{ヨリ}御入^ニ預^リ度

書面願之趣左之通可相心得候事

事

第一二条

但本文御椽行ハ、婦敬式濟之上^{ニモ}宜ク御都合^ニ被成下度候

願之通

右奉願上条々御聞届^ニ被成下置候ハ、一同拝礼^ヲ遂ケ可申^ト難有仕合^ニ可

第三条

奉存候、因^テ只管奉懇願候也

其別院^江御着之上願出^ツヘシ

名古屋別院肝煎

明治十二年二月廿二日

明治十二年二月廿二日

武山勘七

隨行長

渡辺喜兵衛

少教正篠原順明

青木文春

婦敬式願

山田清三郎

今般御入興^ニ付、婦敬式懇願者多分御座候間、御許可被成下度、此段奉

沢田清左衛門

願上候也

河村新藏

名古屋別院輪番

丹波助十郎

二月廿二日

伊地知覺準

山田利兵衛

御隨行長

市在同行惣代

少教正篠原順明殿

鈴木是教

十二年二月御供方

新海新兵衛

円重寺前住職

随行长

篠原順明

同

竹内知信

称揚寺住職

同

藤井好謙

説教者

福田覚城

医師

小森順貞

長勝寺衆徒

會計方

福永茂三郎

御旅中寺務所

沼 僧淳

同

射水伊三郎

浄教寺衆徒

鎗頭

佐々木久造

内事課

佐々木祐寛

外二下男九人

浄教寺住職

兩掛九荷へ人力車九丁

度支課

鈴樹轍応

長持貳棹 地車貳丁

西福寺住職

人力車拾七丁入用

寺務所

沢 実温

外二貳丁計用意

泉龍寺住職

右ハ前ケ須福田新田ニテ

同

泉 祐義

夫々手当致候事

仏願寺住職

廿三日

別院御着

同

武田神哲

一、御居間ニテ 御礼 輪番勘定

高德寺住職

一、本堂御拝礼御参堂之節

同

福井龍澄

御椽行 対面所中ノ間ヨリ本堂へ
外様正面ヨリ御入後堂へ

徳藏寺住職

一、暫時御休息

随行长
徒僧

菅原円成

一、総法中并小教校教員事務掛生徒御礼

近習

川那部十左衛門

但対面所へ御成掛

同

野崎三吾

一、御門末一同へ御礼 於対面所

於古御殿

廿四日

一、晨朝御出仕有之

一、暫時御休息

一、市在肝煎始惣講中御礼 於対面所

但御親教御參堂掛ケ

一、開講

一、御親教

一、演説 福田覚城師

一、婦教式

一、右御還リ掛

御椽行 後堂ヨリ西ノ棟本堂正面東へ高
廊下対面所本間江御入遣

一、臨時御礼左之通リ

成瀬正直殿 例之通リ

組長規察 於古御殿

西派高派 同断

一、申御経 環光院内 小椽智誓

一、申御経 中島郡五城村 信行寺門徒 竹見ひて

御礼各三円宛収之

勤行式伺

廿四日晨朝

正信偈 中拍子

和讃 回リ口善知識ニアフコトモ念讚陶三
次第六首

五遍反

回向文

御文 回リ口抑男子モ女人モ拜読輪番へ
被申付候事

御案内式御伺

晨朝時刻 御案内 午前六時

鐘鳴切 御案内

一、御白衣二重羽 献上御堂二日講中

一、廿六日婦敬式御礼金相収左之通印書請取置事

婦敬式御礼

一、金貳百七拾三円五拾銭

右之通相収候也

士年二月廿六日 旅中度支課 印

名古屋別院

甲第十六号

明治十二年四月

御法主殿御帰山ニ付、東京浅草ヨリ左之通照会状到来

十日 湯本泊

十一日 原泊

十二日 藤枝

十三日 浜松

十四日 岡崎

十五日 前ヶ須

十六日 土山

十七日 御帰山

通知及候也

先駈

四月九日

沢々木祐寛

伊地知覚準殿

法主殿明後十日当地御発途、前条日割東海道御旅行被仰出候附而者、十七日御帰山之御都合ニ而、岡崎駅ヨリ前ヶ須御泊之御日割ニ有之候、右ニ付過日其別院御入之節、平左衛門ヨリ上海本堂切組之御場所江是非御立

一、右ニ付豊橋江御出迎出張致シ、左之願書ヲ以テ願立候処、御聞濟ニ相成候事

寄之儀被願出候事情モ有之、且御帰路其別院江更ニ御立寄無之候而者、御地御門末之機辺モ云何苦情相残リ候而者、後日之不都合ヲモ醸シ可申甚心

御一泊願

配罷在候、前ヶ須御泊ヲ其別院江御一泊相成候様致度、且木場江モ被為成候様相連度、改而御輪番ハ岡崎御泊先迄出頭願書御差出ニ相成度、其上御許可相成候様隨行長江モ打合申置候、篠原殿猶本月中之御滞留御帰山

今般御法主殿御帰西被為在候ニ付、御宿割之義御伺申上候処、当御別院御泊無之旨被仰聞奉驚入候、就而者御東上已来日々御門末一同御帰西御待受掲望仕居候、然ル処御道筋東海道当国御通行被為在候趣ニ而、御別院御一泊モ無之而ハ歎ケ敷奉存候、且又国内人宛ニモ相抱リ可申哉ニ奉存候間、何卒於御別院御一泊被為在候様、御願立被成下度奉願候也

隨行長鈴木教正江被仰付候、右不取放申進度御内定迄如此候也

八郡惣代

四月八日午前六時

旅中度支掛 鈴木轍応

明治十二年卯四月 森 甚助

伊地知覚準殿

谷 伊三郎

尚々肝煎講中一同江も宜希御伝候、べく候

大野仲右衛門

一、宮駅山田清三郎殿ハ御帰山之節ハ、必ス御立寄被成下度旨、兼テ願上

葉山金右衛門

置候ニ付、先駈ハ左之通御通知相成候

新海新兵衛

大法主殿御儀明十日東京御発途ニテ御帰西相成候付而者、来ル十五日熱田

鈴木是教

駅山田清三郎御昼食之筈御治定ニ付、該家江御通知有之度、猶御都合ニヨリ其別院御一泊哉モ難計、未タ御確定ニ不相成候得共、御心得迄御

神田清七

合ニヨリ其別院御一泊哉モ難計、未タ御確定ニ不相成候得共、御心得迄御

森 勝右衛門

町惣代 石黒久三郎

熱田肝煎

山田清三郎

深田清右衛門

御輪番

伊地知覚準殿

御立寄願之儀ニ付添願

別紙之通町肝煎同行。当別院江御立寄之儀願上度旨強申出候ニ付、御聞届被成下度此段添テ御願申上候也

名古屋別院輪番

明治十二年四月

伊地知覚準

御隨行長

小教正鈴木慧淳殿

添願

本文御聞濟御一泊御治定ニ相成候ハ、兼テ支那別院切組大半出来仕候ニ付、乍恐棟梁木場迄御発車ニ而御上覽被成下候ハ、御取持方一際相立可申候得ハ、此段添テ奉願上度候間、宜ク被仰上被下度也

添願

支那国別院本堂切組当国御門末御引請申上当節過半出来ニ付、棟梁ヨリ別紙之通り御願申上度候旨私手許江段々申出候間、右願之如御一覽被成下候ハ、御切組御取持之一助与可相成候間、此段添而御願申上候也

明治十二年四月 名古屋別院輪番 伊地知覚準

御隨行長

少教正鈴木慧淳殿

支那国別院本堂切組御上覽願

昨年六月支那国別院本堂切組被仰付、其後追々木材取寄当節ニ至リ過半出京仕候ニ付、幸御法主殿御別院御一泊ニ付テハ何卒奉備御上覽度、就者僕木場迄御発車被為遊候ハ、如何計大悦可仕候、此段可然御執成御上覽相叶候様奉願候也

九代目棟梁

明治十二年四月十一日

伊藤平左衛門 印

別院御輪番

伊地知覚準殿

御供人員

隨行長 鈴木慧淳殿

沼 僧淳

佐々木祐寛

鈴樹轍応

泉 祐義

沢 実温

安藤恵琳

福井龍澄

川那郡十左衛門野崎参吾

竹内知信

藤井好謙

小森順貞

福永茂三郎

射水伊三郎

宰領老人

メ廿三人 下男七人

十五日

御小休 前後村三田無忍

御小休 鳴海駅 苗 宇多

御昼飯 宮 山田清三郎

但御薄茶御会席御料理献上相成候事

御立寄 棟梁 伊藤平左衛門

御上覧 支那別院切組 木場

但御先輪番木品一々棟梁ヨリ聞宛輪番ヨリ上仕
又御尋有之詳細言上之事
同所ニテ御献茶并御料理献上

御立寄 博物館

右ハ伊藤平左衛門ハ県立博物館掛リ員并市中
有財家扱役数度之願立 不得止御立寄 相成候也

御着 別院

一、御参堂有之

一、御入掛ケ 御札等先規之通リ

御門末一同惣御札 於広間

一、十六日晨朝

御出仕有之

勤行式伺済

正信偈

舌々

和讃 本師龍樹菩薩ハ

念讚洵ニ
次第六首

回向 願以此切徳

御文 南無阿弥陀仏ト申スハ

十六日 御発途

御小休 福田新田 坂野吉之助

御小休 前ケ須 佐藤七三郎

一、御急ニ付人力車貳人曳ニテ別院ヨリ前ケ須江御見送申候也

一、御荷物等人力車人足ニテ差送ル

一、極上縮緬壹疋 廿二日女人講中
献上有之

乙第五号

明治十二年卯六月一日

晴姫様御東上御立寄ニ付、左之通御達有之

本山御静謐御同慶此事ニ候、就者晴姫御方明廿六日御発途ニテ東京岩倉

殿ニ御引越被成候付、六月一日其別院へ御一泊相成候条、此段御通知可

申候也

但上下拾三人程御供ニ候也

十二年五月廿五日 本山度支課 印

名古屋別院輪番

伊地知寛準殿

前文御通知之通、晴姫御方岩倉家江御縁組御治定ニ付、六月一日御一泊

被遊候事

御供方

用人 石原源左衛門 會計方 藤本慶祐

御駕脇 高橋祐左衛門 同 北村米蔵

老女老人 女中三人

仲居老人 下男三人

御道筋東海桑名^〇御渡海前^ケ須駄御上陸新海道御通行^ニ付、勘定方桑名^江御出迎輪番前^ケ須迄御迎旁御小休周旋之事

御小休 前^ケ須 佐藤七三郎

御小休 福田 油屋吉之助

御小休 東起 榊屋伊三郎

六月一日 別院御着

御台所東方作事門^{ヨリ}新御殿^江御入、本堂^并対面所御拝礼、夫^〇大門様上^江御登上^江経蔵等御白砂御見物、夫^〇御座敷回^リ夫^〇御庭何^レモ御案内申上候事

御小休 熱田 山城屋

同 鳴海 加藤平五郎

同 緑屋新三郎

御見送^リ輪番前後迄申上候事

甲第十七号

明治十三年四月廿日午後三時御着

嘉枝宮様御一泊^{大教正殿御慶方 東京岩倉殿へ御出頭ニ付}

御随行人員

松井老幾

苗村清兵衛

會計方 石塚成孝

醫師 斎藤安行

女中三名

下僕貳人

十四日 西京御発途

十九日 桑名別院御一泊

廿日 当別院御着

同月午前十一時

御連枝靈鷲院殿御着^{宮様御東上へ付當院迄御見送之為}

從僧 老名

從者 老名

下僕老人

一、御道筋御小休等為打合前以戸田金八差遣取定候事

御道筋

御乗船 ^{桑名ヨリ 前ケ須江}

御上陸 ^{同所} 佐藤七三郎

御昼飯 ^{福田新田} 坂野吉蔵

御着 別院

一、連枝御出迎寺務方役僧出頭為致候事

一、宮様江御機嫌伺御迎之為十九日輪番桑名江出頭、夫ヨリ供奉仕御道筋先導名古屋市中西別院博物館大須県庁電話局裁判所鎮台御城北之御堀辺、夫ヨリ堀川御下リ病院等所々御案内申上御巡覽被遊御着院相成候

一、御連枝様御玄閑迄御出迎被遊候也

一、御着後本堂御拜礼、引次広間御拜礼

但御拜礼中本堂広間共堂内諸參詣弘候也

一、大門楼上三尊像御拜礼有之、御白砂御覽被遊候

但築地内諸人出入差止仕也

一、御庭廻リ御覽ニ付、御境内夫々御案内申上候

廿一日

晨朝御參詣 於御局之間

御連枝様御出仕無之

一、午前八時 御発車

御小休 宮

御小休 鳴海

御小休 前後

境川迄輪番勘定御見立仕候也

一、御連枝様宮駅迄御見送被遊直様御帰院、夫ヨリ博物館へ御入ニ付、役

僧ヲ以テ其掛リ打合置御案内申上候也

廿二日午前六時

御連枝様御帰京被遊候、輪番始夫々御見立申上候也

甲第十八号

同年六月廿八日午後五時頃御着

嘉枝宮様御一泊御帰西ニ付

供奉人員前之通

一、近日御巡幸当別院行在所被申付大混雑中、御殿廻リ不殘御入用ニ付

宮様被為成候御間無ニ付、宮肝煎山田清三郎方ニテ御止宿相成等之処、

御都合ニヨリ俄ニ別院へ御入相成候ニ付、後堂大教正殿御休息所江御成、

同所ニ於テ御饗応申上候

但御夕飯山田方ニテ種々献上相成事

廿九日

晨朝過広間上檀ニ於テ御荘リ

朝廷ヨリ宮様御拝領物緋ノ御袴始色々院内之者始メ諸人

拝見被差許候事

一、本日午前十時御発途、御順路御東上之節之通リ

御乗船 前々須駅。桑名へ。

一、輪番御入之前夜御泊リ迄御出迎御帰山之節桑名迄御見送り仕候事

御駐轡第二号

明治十三年

御巡幸ニ付、行在所被仰付候事

御着輦 六月三十日午後三時

御發輦 七月二日午前七時

一、天機御窺

兩大教正殿御代理權少教正長円立殿御出張相成候

御行在所へ付、金百五拾円也、下賜り候事

甲第十九号

并撰光院殿共

明治十四年五月^{十二日}_{御着院}廿三日^{御発途}

御法主殿 并撰光院殿御下向

大門楼上三尊像開眼会 并入仏供養会^{十五日}

無上覺院殿御十七回忌御法事^{從十八日}_{至廿一日}

右御法要御執行之義、最初明治十二年五月大門楼上三尊像御安置

願^{并ニ}御調刻願ヲ始御台座前卓三具足御道具等悉皆本山用御雛形上京之

上法要局於テ御取調願出シ新調御出来、猶又大門楼上内外御修覆等件々

相伺承事御出来之上、十四年右御法要御執行相成候、順席之書類綴込卷

冊別段調記有之ニ付、爰ニ略ス

一、右御法要御記録一部御下附之義願上置候間、追テ御下ケ上当院ニ相

備へ入蔵可致事

右供養会御下向ニ付御連枝前々日御入

一、十四年五月十日

撰光院殿御下向 御道筋

十日^{桑名ヨリ}御乗船 新海道

御上陸 前ヶ須駅

真宗大谷派名古屋別院【從明治十四年御成記】_{至明治十七年}

御小休 同所佐藤七三郎

御小休 覬支院

御昼飯 福田新田坂野吉蔵

御小休 当知新田西川九郎兵衛

但同所ニテ御饗応被申上候事

御着院 別院

御供 隨行泉 祐義

從者兩人

下男一人

前略、然者撰光院殿御下向ニ付明十日御道筋御小休等別紙之通奉願候、

就而ハ、覬支院御立寄之節御親教奉願上度引次御隨行演說被成下度旨、該

院附惣同行共ニ願吳候様段々申出ニ付此段宜御取計被成下度、猶私義御

出迎可申上筈之処此頃中兩天ニ而用意方手後仕大混雜罷在候ニ付代理吉

田総太郎御迎差出候、尤本日午後ニ支院へ出頭仕御待請可申上心得ニ候、

此旨御舍之上宜被仰上度、委細之義ハ勘定方ニ可申上候也

名古屋別院輪番

十日 伊地知覺準

撰光院殿

隨行 泉祐義殿

五月十二日

御法主殿 桑名丹羽本陣ニ御乗船

御上陸

前々須駄

御昼飯

同所肝煎 佐藤七三郎

御立寄

蜷支院

御休息

絹川忠清

御小休

福田新田 坂野吉蔵

御小休

当知新田
肝煎 西川九郎兵衛

但同所^二而

殊更^二御饗応被申上候事

御着

別院

供奉人員

隨行長 渥美契縁

内事課録事 佐々木祐寛

録事 惠美龍円

度支課録事 藤原励観

録事參勤 融 了端

承事 重永元龍

小松凌空

楠 慶雲

承事兼參勤 大草恵実

福井龍証

昵近

石原源左衛門

川那部重左衛門

藤井好謙

竹内知信

藤本保之助

医師

小森順貞

會計

堀場宗次郎

射水伊三郎

中番 岩佐軍吾

下男十人

房太郎

君八

米吉

良助

万吉

角助

徳松

伊三郎

伴左衛門

醫師下

敬造

陸尺 六人

御法要配役人員

式事

近松朗譽

小林什尊

井沢勝詮

承仕兼參勤

大草懷雉

藤居了俊

書記兼參勤

鈴木信慧

藤沢了覺

河原賢明

藤谷祐雉

上童 渥美殿嫡子

堂達伽陀師一老

立花慧源

堂僧參勤

稻垣了岸

泉 祐義

高橋休心

本多順惠

川島秀重

渡辺芳寛

赤羽輪番 春日円明

桑名輪番 正田秀含

長浜輪番 万年專順

本山番衆 藤園法雲

中番 法要局從者 川島幸之助

吉永五三郎

上綱様 從者貳人

同 下 壹人

近松殿 從僧壹人

甲第貳十号

明治十四年九月

三河国豊橋赤羽兩別院前住上人御十七回忌御法事御執行^ニ付、御法嗣御

下向御立寄御一泊被遊候^ニ付、左之通御達有之

名古屋別院

輪番伊地知覺準

過般法嗣殿三州御下向御延引相成居候処、弥来^ル十月六日御發途同八日

其別院^江御着院被遊候条、此段相達候事

但当日着院之時間等^ハ先驅^{トシテ}准録事浅井義天出張為致候間協議可

致候也

執事補

明治十四年九月十四日

權中教正渥美契縁

今般御法嗣殿三河国江御下向ニ付、来ル十月六日西京御発途ニ而美濃国養老ヨリ津島、夫ヨリ佐屋海道御通行同八日当別院御一泊被為遊候、右ニ付八日御着後市在法中并肝煎始諸講中世話方同行一同総礼有之、且又帰敬式願人有之候得ハ、九日晨朝引次御免相成直様御発車被遊候条、此段其組内各寺院中江至急御通達有之度候也

但組内各村同行中江ハ、各寺院ヨリ本文之旨無洩通知有之、帰敬式之義ハ、十月五日迄ニ別院寺務方江可願出候事

名古屋
別院輪番

伊地知覚準

前略、然者御法嗣殿御下向ニ付、来ル十月八日高須別院御立寄、夫ハ二子村開墾場へ御立寄本日当別院御着被為在候趣、就而ハ、供奉人員人力車并御荷物等元赤目村船渡シ場迄高須別院御引請ニテ御見送被下度、開墾地ハ当別院迄ハ悉皆当方ニ而御引請可申候、此段御依頼旁及御照会候、至急御回答相成度候也

猶々御帰山之砌ハ其別院ニ而御法会御執行被為在候ニ付テハ、猶更今般之儀者前々須駄へ御迎船御差出有之度候、尤前々須御乗入之場所御周旋是又御頼入候也

名古屋別院輪番

九月廿三日

伊地知覚準

勢州桑名寺町本願寺別院

正田秀合殿

今般御法嗣殿御下向ニ付、廿三日附ヲ以テ御尋問之趣承知仕候、高須ヨリ人力車荷物御見送之儀者養老ハ、国境秧江渡場迄者無論御見送り可申候得共、赤目渡場迄申シテハ、大渡越ニ相成候間、高須之小坊ニテハ、苦情モ有之哉ニ被存候条、尾州海西郡給父村迄御出迎高場村ヨリ人足御差出ニ預リ度、此段御依頼申上候也

一、御帰山之砌者国境ト申ハ、川中ニ候故、御下向之際ハ、該所前ケ須迄御見送り可申筈、御帰山之節者船路故前ケ須桑名屋迄之都合ニ候得共、前ケ須御小休之儀者其役前ハ御取計ニ預度、此段御依頼申上候

一、貴師參勤之義者該別院ハ、旧例モ有之候処參勤ニ相成候様上申仕御聞濟之様ニ承リ候、豊橋之義モ參勤之様ニ浅井氏ハ承候得共僕義モ、当堂參勤之義御達ニ相成、只今ニテハ參勤トモ、又者御解キモ、無之有無不分明ニ候間、貴師ハ、多分參勤ト被在候得共確定之儀者不被申上候也

正田秀合

伊地知覚準殿

一、先駆准録事浅井義天致出張ニ付、御休泊并帰敬式等万件打合候事御道筋左之通

十月六日

西京御発途

七日

御一泊 美濃国 養老説教所

八日

御昼 同 国高須別院

御小休 尾州海西郡三子村開墾場

御小休 同海東郡神守村早川治兵衛

別院肝煎 同郡西桑村三輪茂十郎

御一泊 別院

一、御着後御參堂 有之

一、御待受御門末一同御札 於広間

供奉人名左之通

隨行長 鈴木惠淳

寺務所 和田円什

内事係 朽木唱覚

先驅寺務所 浅井義夫

度支課 川那部証空

説教者 不二門諦観

寺務所 東野春耕

〃 新川顕了

〃 本多良蕙

堂僧一藤 立花惠深

近習 野崎参吾

〃 苗山精兵衛

〃 尾崎盛儀

〃 浅野寛富

〃 長井半次郎

〃 医師 安原逸朗

〃 会計方 松野真大

〃 岡田五郎右衛門

〃 中番 佐々木久造

〃 下男 七人

九日

晨朝御出社

御案内式

晨朝時刻 御案内午前六時

太鼓無之

鐘鳴切 御案内 列座役之

御參堂 御先導 舌々

御勤 正信偈 舌々

和讀^{回リ} 安楽国ニイタルニハ^{次第六百} 念讀洵二

回向 願以此功德

御文^{回リ} 信心獲得 輪番勤之

一、晨朝過

一、御札 役掛^リ法中教授教員并生徒 於古御殿

一、御札 市在肝煎中諸講中始惣同行 於広間

真宗大谷派名古屋別院【延明治十四年御成記】

一、帰敬式 有之

一、引次 御昼食

午前十一時 御発途

御小休 宮駅肝煎 山田清三郎

御小休 前後肝煎 三田柳庵

但御中食献上

御小休 知立駅

御泊 暮戸説教所

豊橋別院

赤羽別院

一、御帰山御道筋

三河国 苅屋村

知立駅 江

廿日

御一泊 鳴海肝煎 加藤平五郎

廿一日

御小休 当知新田肝煎 西川九郎兵衛

但御餐必有之

御昼 東福田 坂野吉蔵

御立寄 蜷支院

御玄関 御入夫 絹川忠衛方 ニテ

御休息

次 ニ 御堂御参拝

次 ニ 絹川家内 并 親族共御礼

支院世話方中へ御礼有之

次 ニ 帰敬式

次 ニ 御真諭 支院惣同行中

次 ニ 演説 説教者勤之

御小休 前々須駅 佐藤七三郎

御乗船 桑名別院御着

一、拙者義豊橋赤羽桑名三別院御法事参勤被申付 ニ 付、供奉仕桑名 ニ 而

御見立申上候也

被下物見込左之通上申

御菓子貳折 ニ子村 開墾場同行中

同 壹折 ニ 神守村

同 壹折 ニ 西条村

一、扇子巻対 御紋附蓋巻 宮 山田清三郎

一、扇子巻対 御紋附蓋巻 御昼 三田柳庵

御菓子貳折 同所 同行中

御帰山之節

一、扇子巻対 御紋附蓋巻 鳴海

一、御菓子 紅色牡丹三十株 絹川

一、寫子貳本
御紋附蓋卷

前々須佐藤七三郎

輪番伊地知覺準

浅井義天殿

支院

御立寄_二付

御上_江

隨行長

録事四人

承事四人

近習六人
醫師六人

會計老_人

仲番老_人

下僕老_人

說教者老_人

演教礼五拾錢

堂僧一老_人

メ金貳拾円七拾錢

甲第廿壹号

明治十五年四月御東上_二付、御法主殿御一泊

願

今般大教正殿東京_江御発車之趣付_{而者}御道中御順路_{ニモ}有之候間、当地別

真宗大谷派名古屋別院【從明治十四年御成記】

院及_七御再建工作支場_{江モ}御立寄被成下度、此段詰合之講中連署_ヲ以奉願候也

尾張国名古屋別院
肝煎廿八日講在京

十五年四月

安藤太兵衛 印

大橋建藏 印

野村林右衛門 印

執事補

權中教正渥美契縁殿

書面願之趣聞濟候事

十五年四月廿日

執事補

權中教正渥美契縁 印

電報左之通

ニジウヨツカソノベツインヲトマリニナル

大谷派本願寺

四月廿一日

内事課 サ、キ

名古屋大谷派別院イジチ

ウカガイノギコノタビハキキヨウシキノタスベテ

ゴメンナシ

四月廿二日

内事課 サ、キ

名古屋別院イジチカクジュン

届

桑名ニテ 伊地知

西京本山大谷派本願寺住職大教正大谷光勝殿今般東上ニ付、明廿四日於
当別院一泊相成候間、此段御届申候也

名古屋 別院吉田
御真諭願

名古屋区下茶屋町
大谷派本願寺別院輪番

明治十五年四月廿三日

伊地知覚準 印

名古屋橋町警察御中

一、廿三日桑名別院御泊ニ付輪番伺出、左之件々御打合申上候事

供奉人員之事

総テ御迎人力車之事

御乗船ニ付潮差引之件

前ケ須御中飯之事伺

同所ニテ索繩講之事伺

御道筋御小休之事

御直諭願貳通差出之事

工作支場御立寄之事

金公在宅有無如何之事

臨時東起村御野立之事伺

小松凌空手紙之事

暮戸⁶伺出之件々上申之事

伺之件々態人足ニテ名古屋^ハ申遣候也

ヲレイヲジキユスベキニジウゴニチアサジスギニナル

今般大教正殿御東上別院御一泊御參堂被遊候節、春來於当地工作支場御
設置相成候ニ付、乍恐此度御直諭被成下候得^ハ一同難有猶一層御取持尽
力可有之哉^ニ奉存候間、前件歎願可仕様重立候、肝煎^{ヨリ}往々申呉候間
右御聞濟被成下度、比段奉願候也

名古屋別院輪番

十五年四月廿三日

伊地知覚準 印

隨行長

權中教正渥美契縁殿

御直諭願

今般御法主殿御通行ニ付、当支院御立寄被成下一同難有仕合奉存候、
就^而者此度^ハ帰敬式御許可無之御小休^{而已ニテハ}私共始參集之同行一般歎^ケ
敷奉存候、乍恐何卒於本堂支院附世話方^并惣同行^ハ御礼之砌御化導奉蒙^ラ
度、右御慈悲^ヲ以御聞濟被成下候得者重々難有仕合奉存候、依^テ連署^ヲ
以此段只管奉歎願候也

海西郡東嶽支院附
世話方同行惣代

明治十五年四月廿三日

和田茂十郎 印

同所
世話方同行惣代

木全重右衛門 印

同所
世話方同行惣代

富田政右衛門 印

同所
世話方同行惣代

安井栄吉郎 印

支院詰列座

法信速成 印

兼輪番

伊地知覚準 印

隨行長

權中教正渥美契縁殿

御道筋

廿四日

桑名御発途

御乗船

御上陸御昼

前ヶ須駅
肝煎

佐藤七三郎

但御上陸掛ヶ御披露索繩講引次家族等奥ニテ御礼次ニ同所男女惣

講中御礼次ニ勝手座敷ニテ索繩講御礼夫御中飯相濟御発途

御立寄

蜆支院

但御玄閔御入絹川忠衛ニテ御休息家族等御礼次ニ御参堂之節御

直諭世話方始惣同行御礼有之

御小休

東福田

坂野吉蔵

御野立

東起

服部伊三郎

御立寄

名古屋堀川

再建工作支場

御泊

別院

但右工作支場へ御立寄ニ付新海道江川筋上ル支場へ御入、夫ヨリ

同所日置橋へ下リ東へ渡リ七面横町本町へ、夫ヨリ下茶屋御門の御

成之事

御隨行人員

御隨行長

渥美契縁

内事課

佐々木祐寛

度支課

藤原励観

寺務所

融 了瑞

同

佐々木誓成

同

小松凌空

同

笠原秀清

近習

石原源左衛門

同

野崎参吾

同

飼田辰寧

同

竹内知信

同

高橋祐左衛門

同

川那部喬太郎

同

安原逸朗

會計

堀場宗次郎

同

射水伊三郎

仲番

佐々木久造

下男 拾人

御礼 御門末一同へ

於広間

一、御着後暫時御休息

一、御参堂

一、御礼 輪番勘定 於御居間

一、廿五日

晨朝御出仕 有之

御案内式伺

晨朝 時刻御案内

鐘鳴切御案内

御出仕 御先導

勤行 正信偈

和讃 本師源空世ニイテ、

五遍反

回向文 願以此功德

御文 回ッロ

一、晨朝過

御親言

引次 演説

御礼

引次

教務取締役正副組長
諸役員 生徒

肝煎諸講中

於古御殿
於同所

於本堂

右相濟

早御中飯

午前十一時 御発途

御小休 鳴海駅野村宇多

御小休 知立駅

御泊 暮戸

前後迄御輪番勘定御見送申上候也

甲第廿二号

明治十五年六月御帰山ニ付

御法主大教正殿御一泊

電信到着

ライゲツフツカクレドラタチニテンノベツインヘライリミツカスグヲ
タチ

浅草本願寺

六月廿六日

サ、キ

名古屋別院

イジチ

御法主殿御帰山ニ付、来ル六月二日当別院御一泊被遊候旨拜承仕候、就夫二日暮戸御発車別院御着ニ付、御小休之義者当日左之ニヶ所ハ從來御小休被遊候、肝煎宅ニ候間左之通御取極相成度、無左候^而ハ苦情可有之

哉ニ存候、依之ニケ所共通路之筋御見分相成度候、扱又三日之分ハ御申越之通先方ハ申通置候間、此段前以及御照会候也

二日

御 昼

知立ト鳴海ノ間ナリ
別院肝煎
阿野村坂
三田無忍
別院肝煎
宮駅

御 小休

深田清左衛門

五月廿八日

輪番 伊地知覚準

先驅 小松凌空殿

別紙卷通至急御用向ニ付、先驅小松殿其会所ハ到着相成次第無矢念直様

御渡被下度候

五月廿八日

輪番 伊地知覚準

三州
暮戸会所世話方中

今般御法主殿御帰山ニ付、来ル六月二日当別院御一泊ニ相成候間御參院有之度、此段及御通知候也

五月廿八日

輪番 伊地知覚準

金園 肝煎連名

今般御法主殿御帰山ニ付、来ル六月二日当別院御一泊相成候条、此段組内各寺院并門徒中ハ無洩早々御通達有之度候也

五月廿八日

輪番 伊地知覚準

各組長宛

真宗大谷派名古屋別院（註）明治十四年御成記

前略御免、然者御法主殿御帰山之義電信ニ而度々伺候処、弥々来ル六月二日当別院御一泊ニ付定テ三日其別院御一泊ト存候間此段及御報知候、就而者唯今先驅小松殿ハ書面ヲ以前ケ須駅佐藤氏三日御昼頼度旨申越ニ付同人江其旨当方ハ頼遣置候間御承知置、扱又御船之義ハ例之通御配心有之度候、猶此段ハ帰敬式ハ御免無之候御指令ニ付、前件御承知迄申進候也

五月廿八日

輪番 伊地知覚準

三重県下桑名
大谷派別院輪番

正田秀含殿

御船拝借願

今般本派本願寺大教正大谷光勝殿從東京帰山ニ付、来ル六月二日当別院一泊相成候、就夫両堂再建用檜材当地ニテ買上即堀川ニ囲有之候処一覽之為、本日着院之際宮駅ヨリ工作支場迄乗船相成候哉モ難計ニ付為用意御拝借願度、此段御詮議被成下度奉願上候也

輪番 伊地知覚準

愛知県土木課御中

一、六月一日暮戸御一泊ニ付、前日ハ豊橋江御出迎申上、左之願書差出

其余御小休之件

二日權現祭之事

二日三日御精日如何之事、宮ハ堀川通御乗船伺之事旁色々伺上候也

御滞在願

今般御法主殿御帰山ニ付、来ル六月二日当別院御一泊被遊候旨敬承仕候、就而者三日四日御日柄之儀ニ付乍恐御在院奉蒙御化導度、何卒右之趣御許可被成下度肝煎惣代連署ヲ以奉歎願候也

肝煎惣代

明治十五年六月一日

深田清左衛門 印

山田清三郎 印

青木文之助 印

安藤太兵衛 印

御隨行長心得

三級出仕楠潜龍殿

前書之通一同懇願ニ付、奉添願候也

名古屋別院輪番

伊地知覺準 印

書面願之趣難聞濟候事

明治十五年六月一日

檜材御上覽願

御法主殿来ル六月二日当別院御成被為遊難有敬承仕候、就而者過日檜材多分御買上相成堀川ニ囲有之候間、恐多願品ニハ候得共、別紙図面之通宮駅一文渡場ヨリ御乗船兩堂御用材御上覽之上工作支場ニ而御上陸夫ヨリ御着院被成下候様、肝煎始八郡同行懇願ニ付何卒御詮義之上御聞濟被成下度、惣代連署ヲ以奉願上候也

肝煎同行惣代

明治十五年六月一日

深田清左衛門 印

山田清三郎 印

青木文之助 印

鈴木是教 印

新海新兵衛 印

御隨行長心得

三級出仕楠潜龍殿

前書之通一同懇願ニ付、奉添願候也

名古屋別院輪番

伊地知覺準 印

書面之趣木材御見分之儀ハ御聞置、御乗船之儀ハ難聞濟候事

但御道筋之儀ハ龜谷甲道ヨリ佐屋街道御通行之事

明治十五年六月一日

(図面省略)

御隨行人員

隨行長 大講義 楠 潜龍

其余御供先之通り也

二日 暮戸御発途

御小休 知立駅

御 昼 前後村肝煎 三田無忍

御小休

宮駅肝煎 深田清左衛門

同所⁶ 凶面之通本町通ヨリ 亀谷甲道堀川へ同所ニテ 檜材御上覽夫ヨリ

堀川筋上へ新橋ヨリ本町へ

御着

別院

一、御参堂

一、御礼 御門末一統惣礼 例之通

三日

晨朝御出仕

御案内式

晨朝時刻

御案内

午前五時

鐘鳴切

御案内

五時三十分

御参堂

御先導

役僧勤之

勤行

正信偈

舌々

和讃^回、口

道光明朗超絶^{セリ}

次第六首
念續洵二

回向文^回、口

抑当年ヨリコトノホカ

一、午前九時

御発途

別院ヨリ下茶屋町本町へ、夫ヨリ七面横町日置橋再建工作支場へ御

成ニテ、御乗車之俵輪番御案内申上作事場御巡覽御出門之際事務取

扱所所ニテ留車御門末中江御親言有之、夫ヨリ江川通新海道江

御小休

福田新田 坂野吉蔵

御立寄

蛭支院

御昼

前々須 佐藤七三郎

一、輪番桑名江御見送申上候也

甲第廿三号

明治十七年四月五日

新御裏恒君様御帰山ニ付、御一泊有之

此書状来^ル

拜啓先以御本廟御静謐時下追日暖氣相催候処各位愈御安泰御寺務之段傾然之至ニ候、陳者過般来新裏様御東上被成候処来^ル四月初旬東京御発途陸路御帰京可被成、就^而者御帰路之節其別院へ御立寄都合ニヨリ一泊可被成筈ニ御座候間、予^而其御用意有之度候、尚日限之儀ハ浅草御出立前隨行従者ヨリ御通知可被致筈ニ候条御心得迄、此段及御通報候也

十七年三月廿三日 本山内事課菊池秀言

名古屋別院

輪番 伊地知覚準殿

同補 愛宕石寂明殿

新御裏様本月廿九日東京浅草御発途ニテ其別院四月六日御一泊相成候条、

此段御通知申候也

明治十七年三月廿五日 浅草別院輪番 佐々木祐寛

名古屋別院輪番 伊地知覚準殿

尚万一御旅中御都合ニテ御日割相違之筋ハ隨行藤井好謙ヨリ電信ヲ以

御通知可申筈ニ有之候条御心得迄申入候

右之通り藤井好謙殿の報知有之ニ付、四日輪番岡崎迄御迎出頭致シ翌五日御供奉ニテ帰院

四月五日岡崎御発車

御小休 暮戸 説教場

三田無忍

午後二時頃御着院

女中三人 随行藤井 僕一人

暫時御休息有之 次ニ参堂

古御殿ニ於テ肝煎始メ諸講中御礼有之

翌六日八時別院御発車

御小休 福田 坂野吉蔵

同 前々須 佐藤七三郎

前ヶ須迄補番愛宕寂明致僧法信速成御見立申上候、同所ヨリ桑名江

御乗船相成候

ナゴヤ シモチャヤチ ハママツ

ホンガンジ ベツインイジチヨシタ ハナヤニテ フジイ

ヨツカヲカザキヲトマリイツカソチベツインヘラ

イリニナル

シモチャヤマテ キヨトシモク

ホンガンジベツイン トキハマチ

ホンガンジ ナイジカ

ヲウラサマヲツキアレバスグシラセ

十七年

十二月十三日ヨリ五昼夜当別院報恩講ニ付、為御代理靈寿院殿御着院

同十七日十八日十九日三日之間新門様御入興ニ付、大速夜日中御執行之

事

同十九日御発車

十八年

十二月十三日ヨリ前同断、為御代理撰光院殿御着院

同廿日御発車

十九年

五月三日ヨリ六日マテ御下向、大門様并新々門様御両方越後国御巡化ニ付、

御滞在之事

三日御泊り入四日日中御執行之事

同十一月二日ヨリ十九日マテ、新門様当国一般御巡化ニ付、御下向

三日御着院

三四日御速夜御執行之事

五日招魂祭御来リニ相成之事

御巡化六日始リ知多郡

同十二月十三日ヨリ前同断、為御代理撰光院殿御着院

同廿日御発車

廿年

同五月十四日十五日十六日、慧燈大師御供養會ニ付、御下向、大門様并新々様御兩方之事

新々門様十二日御着院

大門様美濃國御巡化ニ付、十四日御着院之事

同十八日御発車

大門様桑名別院ハ御見送奉申、新々門様ハ汽車ニテ長浜ハ御見送奉申、猶

同四月兩門様御下向ニ付相統講施行義有之ニ付一國撰光院御巡化之事

同十二月十三日ヨリ前同断、為御代理靈壽院御着院

同十九日御発車

廿一年

善如上人五百会執行ニ付、五月廿七日廿八日廿九日新門様御下向之事

廿七日御着院

同卅日卅一日相統講ニ付御親教之事

六月一日二日普通校開業式ニ付御親謁之事

廿年

二月廿二日廿三日廿四日天皇御巡幸ニ付御行在所、皇后様御連車之事

廿壹年

十二月十三日ヨリ如例年報恩講ニ付、御代理撰光院殿御入、新々門様結

願逮夜御成

廿貳年

十二月十三日ヨ如例年報恩講ニ付、御使僧藤井詰然殿出張、御代理足利

朗雲殿十六日逮夜ヨ御出勤之事

明治廿三年三月十七日

当御門跡様東京ヨリ御帰山懸ケ御立寄、翌十八日晨朝御出仕、入彼岸兼日中御代始御直命御消息僧侶教諭演說等有之、其他御機嫌伺諸講御語有之、同十九日第宅列車ニテ御帰山ノ事

但今度ハ英磨殿御同席帰西之事

隨行長渥美執事 録事金松

承事高橋休心 會計方堀場宗十郎

其他下僕四人執事僕共

(裏表紙)

「名古屋別院」